山元町文化財調査報告書第 11 集

小平館跡 I

－小平地区宅地造成工事に係る発掘調査報告書－

小平館跡（１次調査）A区

平成２７年６月

宮城県亘理郡山元町教育委員会

仙南ベニヤ株式会社

序　　文

山元町は古くから身近に豊かな海と山を擁し、人々は恵まれた自然の中で生活を営んできました。その足跡は埋蔵文化財として、町内各地に散在しております。埋蔵文化財は、文献などには記録されていない地域の歴史を解明できる貴重な歴史資料であります。これらの遺跡は、先人が残した生活の証でもあり、かけがえのない文化遺産として将来の人々に継承するとともに、現在の生活の中において積極的に活用していくことが、私たちに課せられた責務であると考えております。

しかし、土地利用と深く結びつきの強い埋蔵文化財は、絶えず開発事業によって破壊・消滅の危機にさらされております。このため、当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

今回の小平館跡の調査は、山元町小平地区の宅地造成工事に際し、事業主との協議・調整に基づき、平成24年度に当教育委員会が実施したものであります。今回の発掘によって、中世以降と考えられる人々の生活の跡が確認され、山元町の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、この調査成果を収録したもので、地域における歴史解明の資料として広く活用され、埋蔵文化財の保護と理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力をいただいた関係機関の方々、また、直接調査にあたられました皆様に心から感謝申し上げます。

平成２７年６月

山元町教育委員会
教育長　森　憲一

例　言

1．本書は、宮城県亘理郡山元町小平字北地内に所在する小平館跡（第１次調査）の発掘調査報告書である。
2．本遺跡の発掘調査は、小平地区宅地造成工事に伴う事前調査として行ったものである。発掘調査・整理作業・報告書作成に係る一連の業務は、平成 24・26・27 年度に、調査原因となった事業主体者である仙南ベニヤ株式会社から業務委託を受けた山元町が実施した。
3．本遺跡の発掘調査と整理作業は、山元町教育委員会が主体となり、文化財担当部局のある生涯学習課が担当した。小平館跡（1 次調査）の現地発掘調査・報告書作成業務を行った平成 24・26・27 年度の職員の体制は下記のとおりである。

教育長	森　憲一
課長	齋藤 三郎
班長	武田 賢一（H24）、阿部 正憲（H26 ～）
主事	山田 隆博
主事	丹野 修太（任期付職員）
調査補助員	藤田 祐（H24 ～ H26）、渡邊 理伊知（H24）、佐伯 奈弓
発掘作業員	相原 一智、飯川 幸男、石井 進、伊藤 清、伊藤 成夫、太田 千佳子、及川 博子、小野 和喜子、後藤 征郎、齋藤 健二、佐藤 明、白鳥 浩二、立谷 重晴、南條 義博、深澤 久美、増川 悠記、三浦 長、森 忠男、矢吹 共子、渡邊 洋子、遊佐 豊美、横山 真、渡部 修
整理作業員	及川 博子、渡邊 洋子

4．発掘調査、報告書作成に際して、以下の方々からご指導・ご助言・ご協力を賜った。
　宮城県教育庁文化財保護課、仙南ベニヤ株式会社、小平区（敬称略）
5．石器の石材については、実測者が肉眼観察を行った。
6．現地発掘調査について、指揮・監督を山田・丹野・藤田・渡邊が担当し、現地作業を発掘作業員、断面図の作成は及川・深澤・矢吹・渡邊（洋）が行った。
7．本書の整理・作成にあたり、遺物の洗浄・注記・接合・復元・拓本は、佐伯が中心となり整理作業員がこれを助けた。遺物抽出については山田が担当した。
　遺物の実測図作成は、土器類を山田、石器を藤田、土器実測図のトレースは佐伯、石器実測図のトレースは渡邊（洋）が行った。
　遺構整理については、全般を丹野が担当し、断面図トレース、データ入力・校正を佐伯、図面修正・データ照合を佐伯・渡邊（洋）・及川が行った。
8．本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。調査区の測量原点は以下のとおりである。方位は座標北を表している。なお、今回使用した座標値は、東日本大震災後の値を基本としている。

T4　：　X=-223917.742、Y=2781.880、Z=16.577m
GK6　：　X=-223899.221、Y=2886.217、Z=11.965m
GK7　：　X=-223900.929、Y=2884.336、Z=12.012m
GK8　：　X=-223911.560、Y=2872.929、Z=12.404m
GK9　：　X=-223912.820、Y=2871.649、Z=12.489m
GK10：　X=-223921.380、Y=2863.030、Z=12.950m

9．本書の第2図は、土地分類基本調査における1/50,000地形分類図「角田」をもとに作成したものである。
10．本書の第3図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000の地形図を複製して作成したものである。
11．本書で使用した土色の記述にあたっては、「新版標準土色帖2010年版」（小山・竹原1973）を参照した。
12．本書で使用した遺構略号は、「発掘調査の手引き」（文化庁文化財部記念物課2010）を参考にし、以下の通りとした。
　ＳＢ：掘立柱建物跡、ＳＫ：土坑、ＳＤ：溝跡、Ｐ：柱穴・小穴
13．出土遺物の登録番号は、以下の通りとした。
　Ｃ：土師器、Ｅ：須恵器、Ｋ：石器
14．遺構・遺物実測図の主な縮尺は下記のとおりで、それぞれ図中にスケールを付して示した。
　調査区全体図：1/200・1/400、調査区部分図：1/100、掘立柱建物跡：1/100・1/200、溝跡：1/80、
　土坑：1/40、断面図：1/40・1/50、遺物実測図：1/3
15．遺物実測図において、土器類の実測図については、須恵器断面を黒塗り、その他の土器を白抜きとした。
　また、黒色処理が施された土師器については、スクリーントーンにより示した。
16．本書の出土遺物のうち、土師器については、成形にロクロを使用したものをロクロ成形・ロクロ土師器、
　ロクロを使用していないものを非ロクロ成形と呼ぶことにした。
17．基本層序は、ローマ数字とアルファベット小文字を組み合わせて表記した。
18．標高は、水準点を基にした海抜高度で示した。
19．遺構内の傾斜の部分は「 ╥╥ 」、後世の攪乱は「攪」と表記し、その傾斜部は「 ╦ 」で示した。
20．その他、発掘調査の方法等については、第Ⅲ章2にまとめた。
21．本書の執筆・編集については、整理を担当した調査員の協議を経て、山田が担当した。
22．発掘調査に伴う出土遺物および写真等の調査記録資料については、山元町教育委員会が保管している。

調　査　要　項

遺　　跡　　名：**小平（こだいら）館跡**　（宮城県遺跡地名表登載番号14020　遺跡記号KD）
所　　在　　地：宮城県亘理郡山元町小平字北
調 査 原 因：小平地区宅地造成工事に係る事前調査
調 査 期 間：確認調査　平成25(2013)年2月18・19日
　　事前調査　平成25(2013)年2月21日～3月1日
調査対象面積：約8,120㎡
調 査 面 積：約1,020㎡【うち事前調査面積：約425㎡（A区281㎡、B区144㎡）】
調 査 主 体：山元町教育委員会
調 査 担 当：山元町教育委員会生涯学習課
　　山田　隆博　【山元町教育委員会　生涯学習課　主事】
　　丹野　修太　【山元町教育委員会　生涯学習課　主事（任期付職員）】
　　藤田　祐　　【山元町教育委員会　生涯学習課　臨時職員（調査補助員）】
　　渡邊　理伊知【山元町教育委員会　生涯学習課　臨時職員（調査補助員）】
調 査 協 力：仙南ベニヤ株式会社

目　次

序文

例言・調査要項

目次・挿図目次・表目次

第Ⅰ章　遺跡の概要 …… 1
1．遺跡の位置と地理的環境 …… 1
2．周辺の遺跡 …… 2
3．小平館跡の概要 …… 7

第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過 …… 9
1．発掘調査に至る経緯 …… 9
（1）事前協議 …… 9
（2）確認調査 …… 9
2．小平館跡（1次調査）発掘調査の経過 …… 9
（1）事前調査の経過 …… 9
（2）整理・報告書作成作業の経過 …… 11

第Ⅲ章　発掘調査 …… 12
1．基本層序 …… 12
2．発掘調査の方法 …… 14
3．発見された遺構と遺物 …… 15
（1）溝跡 …… 22
（2）土坑 …… 23
（3）ピット・掘立柱建物跡 …… 29
①ピットの特徴と出土遺物 …… 29
②掘立柱建物跡 …… 38
（4）その他の出土遺物 …… 42

第Ⅳ章　総括 …… 43
1．出土遺物の特徴と時期 …… 43
（1）土師器・須恵器 …… 43
（2）石器 …… 43
2．検出した遺構の特徴と時期 …… 43
（1）掘立柱建物跡及びその他の柱穴・ピット …… 43
（2）溝跡 …… 44
（3）土坑 …… 44
3．まとめ …… 44

引用・参考文献

報告書抄録

挿図目次

第1図　山元町と小平館跡の位置 …… 1
第2図　小平館跡周辺の地形分類図 …… 1
第3図　小平館跡の位置と山元町内の遺跡分布 …… 4
第4図　小平館跡の概略図及び小平家の墓碑 …… 8
第5図　小平館跡（1次調査）調査区の位置 …… 10
第6図　小平館跡（1次調査）A区・B区基本層序 …… 13
第7図　小平館跡（1次調査）A区調査区全景 …… 16
第8図　小平館跡（1次調査）B区調査区全景 …… 17
第9図　小平館跡（1次調査）確認調査トレンチ全景 …… 18
第10図　小平館跡（1次調査）調査区全体図 …… 19・20
第11図　小平館跡（1次調査）A区・B区遺構配置図 …… 21
第12図　SD1溝跡 …… 22
第13図　SK1土坑 …… 23
第14図　SK2・3土坑 …… 24
第15図　SK4土坑 …… 25
第16図　SK5土坑 …… 25
第17図　SK6・7土坑 …… 26
第18図　SK8土坑 …… 27
第19図　SK9土坑 …… 27
第20図　SK10土坑 …… 28
第21図　SK11土坑 …… 28
第22図　SK12土坑 …… 29
第23図　小平館跡（1次調査）B区遺構配置図 …… 30
第24図　小平館跡（1次調査）B区柱穴・ピット断面 …… 31
第25図　小平館跡（1次調査）B区柱穴・ピット検出状況 …… 32
第26図　小平館跡（1次調査）A区東半柱穴・ピット
遺構配置図・断面図 …… 34
第27図　小平館跡（1次調査）A区東半柱穴・ピット
検出状況・断面 …… 35
第28図　小平館跡（1次調査）A区西半柱穴・ピット
遺構配置図・断面図 …… 36
第29図　小平館跡（1次調査）A区西半柱穴・ピット
検出状況・断面 …… 37
第30図　SB1～3掘立柱建物跡完掘状況・柱穴断面 …… 39
第31図　SB1掘立柱建物跡平面・断面図 …… 40
第32図　SB2掘立柱建物跡平面・断面図 …… 40
第33図　SB3掘立柱建物跡平面・断面図 …… 41
第34図　小平館跡（1次調査）出土遺物 …… 42

表目次

第1表　山元町遺跡一覧 …… 5
第2表　小平館跡（1次調査）土坑属性表 …… 23
第3表　小平館跡（1次調査）柱穴・ピット属性表 …… 33
第4表　小平館跡（1次調査）掘立柱建物跡属性表 …… 38
第5表　小平館跡（1次調査）掘立柱建物跡柱穴属性表 …… 38

第Ⅰ章　遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地理的環境

宮城県亘理郡山元町は、仙台市から南南東に約 40km 離れた県南東部に位置し、地理的には仙台平野南端にあたる(第１図)。町の西側は福島県から延びる阿武隈山地の支脈、東側は太平洋で、これらの間には沖積地が広がっている。町内を北上する阿武隈山地は、標高 200～300m の山地・丘陵地で、北端では阿武隈川と接する。丘陵縁辺は、阿武隈山地に源を発する小河川によって開析された櫛状の谷地形となり、谷底には谷中平野が形成されている。丘陵の東側には、沖積地を挟んで海岸線に平行した４列の浜堤（第Ⅱ浜堤列・第Ⅲa～c 浜堤列）が認められる(伊藤 2006、藤本・松本 2012)。

小平館跡は、亘理郡山元町小平字舘・北に所在し、山元町役場の北北西約 2.6km に位置する(第２・３図)。遺跡は、阿武隈山地から東に延びる標高 12～32m の中位・低位段丘上の平坦面・緩斜面に立地する（第２図)。遺跡の範囲は、東西 380m、南北 150m ほどの広がりをもつ。現況は、山林、畑地、荒地、宅地、寺院、墓地である。

第１図　山元町と小平館跡の位置

第２図　小平館跡周辺の地形分類図

2. 周辺の遺跡

山元町には、現在まで100余りの遺跡が登録されている（第3図、第1表）。その分布は、地形的に阿武隈山地裾部、そこから延びる丘陵縁辺部、浜堤列周辺の大きく3つに分けられる。阿武隈山地裾部には縄文時代から中世に至る各時代の遺跡がある。丘陵縁辺部には縄文時代から近世までの遺跡が分布するが、その主体は古代と中世である。浜堤列周辺は近年の分布調査により発見された遺跡がほとんどで、古代以降の遺跡が分布している。

これまで山元町内の遺跡のうち本格的な発掘調査が実施された遺跡は、中島貝塚や合戦原遺跡、狐塚遺跡などわずか数例で、町内の原始から中世の歴史は未解明な点が多い状況にあった。しかし、平成21年度以降、町内では常磐自動車道山元IC開通に伴う周辺地区の開発や常磐自動車道（県境－山元間）建設工事、平成23年3月11日に発生した東日本大震災に伴う復興事業などに関連した発掘調査が継続的に行われ、これまで知られていなかった山元町の歴史が少しずつ明らかになってきている。

以下、これまでに調査された代表的な遺跡について、時代ごとに記述する。

【縄文時代の遺跡】

前期の北経塚遺跡（10）、前期～中期の西石山原遺跡(84)、中期～晩期の中島貝塚(4)、後期の谷原遺跡(67)、晩期の中筋遺跡(80)などがある。

北経塚遺跡では、平成15・21・23年に調査が行われ、前期初頭の竪穴住居跡、土坑、遺物包含層、ピット群などが検出された（関2004、山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

西石山原遺跡では、平成22・23年に調査が行われ、前期の土坑、中期末葉の竪穴住居跡などが検出された（初鹿野ほか2012）。

中島貝塚では、昭和53年に調査が行われ、縄文土器・石器とともに貝殻、魚骨・獣骨が数多く出土した（山元町誌編纂委員会編1986）。

谷原遺跡では、平成20・22・24年の調査で、後期の掘立柱建物跡で構成される環状集落が確認され、この他、土坑や遺物包含層などが検出された（宮城県考古学会2010・2012）。

中筋遺跡では、平成24年の調査で、晩期の遺物包含層が検出された（山田・藤田・佐伯2015）。

【弥生時代の遺跡】

中筋遺跡(80)、狐塚遺跡(56)、館の内遺跡(9)、北経塚遺跡(10)、日向遺跡(68)などがある。

中筋遺跡では、平成24年の調査で、水田跡や遺物包含層などが検出され、中期前葉の鱸沼式～中期中葉の枡形囲式を中心とする土器群や石包丁、板状石器などが出土した。また、同時期の津波痕跡の可能性のある砂層も確認されている（山田・藤田・佐伯2015、山田2015a）。

狐塚遺跡では、平成5年の調査で、溝跡が確認され、中期後半の十三塚式の土器が出土している。（窪田1995）。

北経塚遺跡・館の内遺跡・日向遺跡では、弥生時代の遺構は確認されていないが、遺物が出土している。北経塚遺跡では、平成21・23年の調査で、中期後半の十三塚式・後期の天王山式の土器のほか、石包丁が出土した（山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。館の内遺跡では、平成13年の調査で、中期後半の十三塚式の土器が出土した（引地2002）。日向遺跡では平成23年の調査で、中期後半の十三塚式の土器や石包丁が出土した（山田・藤田2015）。

【古墳時代の遺跡】

前期の中筋遺跡(80)・石垣遺跡(69)・的場遺跡(70)、前期～中期の北経塚遺跡(10)、中期～終末期の合戦原遺跡(14)、後期～終末期の狐塚遺跡(56)・日向北遺跡(108)・日向遺跡(68)・谷原遺跡(67)・熊の作遺跡（53)・井戸沢横穴墓群(1) などがある。

中筋遺跡では、平成 24 年度の調査で、前期の土坑墓群が検出された（山田・藤田・佐伯 2015)。

石垣遺跡では、平成 23 年の調査で、前期の竪穴住居跡が検出された（山田・藤田 2014)。

的場遺跡では、平成 23・25 年の調査で、前期の竪穴住居跡・土坑・溝跡が検出された（山田・藤田・佐伯 2014)。

北経塚遺跡では、平成 21・23 年の調査で、前期の竪穴住居跡・方形周溝跡、中期の古墳周溝跡が検出された（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013)。

合戦原遺跡では、平成 2 年に調査が行われ、南小泉式期の大型の竪穴住居跡が検出された(岩見ほか 1991) ほか、平成 8・9 年の測量調査で前方後円墳を含む古墳群が確認されている（青山ほか 2000)。また、平成 26・27 年の調査で終末期の横穴墓群や竪穴住居跡が確認されている（山田 2015b)。

日向北遺跡では、平成 24 年の調査で、終末期前後の竪穴住居跡が検出された（山田・丹野 2014)。

日向遺跡では、平成 24 年の調査で、後期の竪穴住居跡、終末期の遺物包含層が検出された（山田・藤田 2015)。

谷原遺跡では、平成 22・24 年の調査で、後期の竪穴住居跡が検出された（宮城県考古学会 2010)。

狐塚遺跡では、平成 4・5 年に調査が行われ、後期の竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡が検出された（千葉 1993、窪田 1995)。

熊の作遺跡では、平成 25・26 年の調査で、後期～終末期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡が検出された(宮城県考古学会 2013、初鹿野 2014・2015)。

井戸沢横穴墓群では、昭和 44 年に調査が行われ、調査された数基の横穴墓の特徴が福島県浜通り地方に点在する横穴墓群と類似することから、その関連性が指摘されている（佐々・志間・氏家 1971)。

【奈良・平安時代の遺跡】

館の内遺跡(9)、合戦原遺跡(14)、狐塚遺跡(56)、谷原遺跡(67)、涌沢遺跡(107)、日向遺跡(68)、石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、内手遺跡(83)、上宮前北遺跡(109)、向山遺跡(57)、熊の作遺跡（53)、北名生東窯跡（34)、犬塚遺跡（110)、新中永窪遺跡（111)、雷神遺跡（112)、内手 B 遺跡（115)、作田山遺跡（114) などがある。

館の内遺跡では、平成 13 年の調査で、規格的に配置された掘立柱建物跡や竪穴住居跡が検出され、墨書土器や製塩土器などが出土している（引地 2002)。

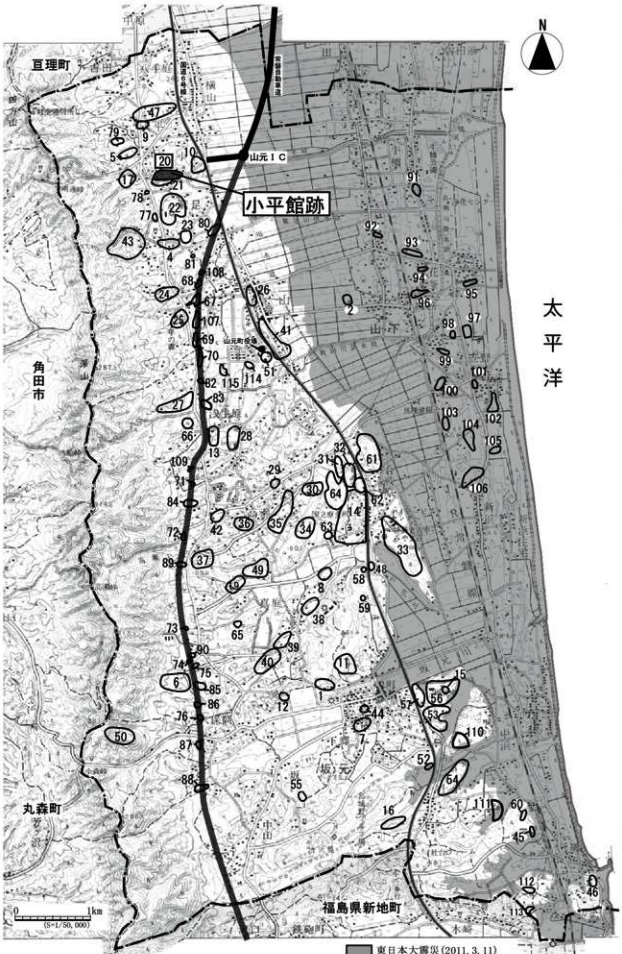
合戦原遺跡では、平成 2 年の調査で、奈良時代～平安時代の須恵器窯跡が検出され（岩見ほか 1991)、平成 26・27 年の調査で、製鉄炉跡・木炭窯跡・焼成土坑が確認されている。

谷原遺跡では、平成 20・22・24・25 年の調査で、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・大溝・土坑などが検出され、円面硯や風字硯が出土している（宮城県考古学会 2010・2012)。

涌沢遺跡では、平成 24 年の調査で、平安時代の集落跡や土器廃棄土坑、製鉄関連遺構が検出され、墨書土器や八稜鏡などが出土した(宮城県考古学会 2012、初鹿野 2013a)。

日向遺跡では、平成 24 年の調査で、8 世紀末～9 世紀初頭・9 世紀後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・遺物包含層が検出された（山田・藤田 2015)。

石垣遺跡では、平成 23 年の調査で、9 世紀後半の竪穴住居跡・竪穴状遺構、土器廃棄土坑が検出され、



第３図　小平館跡の位置と山元町内の遺跡分布

第1表　山元町遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代
1	井戸沢横穴墓群	横穴墓	古墳後
2	新田遺跡	散布地	古墳後・古代
3	欠番	—	—
4	中島貝塚	貝塚	縄文中～晩
5	味曽野横穴墓群	横穴墓	古墳後
6	影倉遺跡	散布地	縄文後・晩
7	襄首城跡	城館	中世・近世
8	上台遺跡	散布地	弥生・平安
9	館の内遺跡	集落	古代
10	北経塚遺跡	集落・古墳・経塚	縄文前、古墳前・中世
11	愛宕山館跡	城館	中世
12	日向遺跡	散布地	古墳中・後
13	浅生原遺跡	散布地	縄文中・後、中世
14	合戦原遺跡	集落・横穴墓 須恵器窯跡・製鉄	古墳中・後、古代
15	狐塚古墳群	古墳	古墳後
16	一の沢遺跡	散布地	弥生
17	清水遺跡	散布地	弥生
18	欠番	—	—
19	北鹿野遺跡	散布地	古墳
20	**小平館跡**	**城館・散布地**	**古墳前・古代・中世**
21	舘横穴墓群	横穴墓	古墳後
22	山崎横穴墓群	横穴墓	古墳後
23	中道遺跡	散布地	縄文・古墳後
24	石堂遺跡	散布地	古代
25	山寺館跡	城館	中世
26	作田山館跡	城館	中世
27	入山遺跡	散布地	縄文・古代
28	下大沢遺跡	散布地	縄文前
29	宮後遺跡	散布地	古代
30	大久保遺跡	散布地	縄文・古墳・古代
31	舘下窯跡	須恵器窯	古代
32	中島館跡	城館	中世
33	戸花山遺跡	古墳・須恵器窯・ 製鉄・散布地	縄文・古墳・古代
34	北名生東窯跡	須恵器窯	古代
35	室原遺跡	散布地	古代
36	北の原遺跡	散布地	縄文早・前・後
37	南山神遺跡	散布地	縄文早・前
38	原遺跡	散布地	古墳
39	浅生遺跡	散布地	古代
40	南権現遺跡	散布地	縄文早・前、古墳
41	山下館跡	城館	中世
42	石山原遺跡	散布地	縄文
43	笠足館跡	城館	中世
44	舘下遺跡	散布地	弥生
45	大堤小塚十三塚	塚	近世
46	唐船番所遺跡	番所	近世
47	大平館跡	集落・城館	平安・中世
48	貝吹城跡	城館	中世
49	真庶館跡	城館	中世
50	新城山古館跡	城館	中世
51	日向窯跡	窯跡	古代
52	作田横穴墓群	横穴墓	古墳後
53	熊の作遺跡	集落	古墳後・古代
54	駒場原遺跡	散布地	古代
55	川内遺跡	製鉄	古代
56	狐塚遺跡	集落・生産	古墳中～古代
57	岡山遺跡	集落・生産	古墳・古代
58	卯月崎塚	塚	中世・近世
60	東作経塚	経塚	中世
61	合戦原B遺跡	製鉄	古代
62	合戦原C遺跡	古墳	古墳中
63	北名生東B窯跡	窯跡	古代
64	大久保B遺跡	散布地	古代
65	北権現遺跡	製鉄	古代
66	山王遺跡	製鉄	古代？
67	谷原遺跡	集落	縄文後・弥生～中世
68	日向遺跡	集落	古墳後～中世
69	石場遺跡	集落	縄文・古墳前 平安・近世
70	釣場遺跡	集落	縄文前・古墳前 平安・近世
71	上宮前遺跡	散布地	平安・中世
72	北山神遺跡	散布地	縄文
73	新田B遺跡	散布地	古代
74	影倉B遺跡	散布地	縄文
75	影倉C遺跡	散布地	古代
76	荷駄場遺跡	散布地	縄文
77	北遺跡	散布地	古代
78	北ノ入遺跡	散布地	古代
79	味噌野遺跡	散布地	古代
80	中筋遺跡	水田・包含層 墓域？	縄文晩・弥生中 古墳前
81	赤坂遺跡	散布地	縄文・弥生
82	山王B遺跡	集落・散布地	縄文・近世
83	内手遺跡	製鉄・生産	平安
84	西石山原遺跡	集落	縄文前・中、平安
85	影倉D遺跡	製鉄	古代
86	荷駄場B遺跡	散布地	古代
87	上小山遺跡	散布地	古代・中世
88	法羅遺跡	散布地	縄文
89	南山神B遺跡	散布地	縄文・古代
90	影倉E遺跡	散布地	縄文・古代・中世
91	北泥沼遺跡	散布地	古代
92	泥沼遺跡	散布地	古代
93	畑台遺跡	散布地	古代
94	北頭無遺跡	散布地	古代
95	浜遺跡	散布地	古代
96	頭無遺跡	散布地	古代
97	花笠遺跡	散布地	古代
98	西北谷地A遺跡	散布地	古代
99	西北谷地B遺跡	散布地	古代
100	西須賀遺跡	散布地	古代
101	笠野A遺跡	散布地	古代
102	笠野B遺跡	散布地	古代
103	北中須賀遺跡	散布地	古代
104	狐須賀遺跡	散布地	古代
105	笠浜遺跡	散布地	古代
106	新浜遺跡	散布地	古代
107	浦沢遺跡	集落	縄文・古代～近世
108	日向北遺跡	集落	古墳後・中世～近世
109	上宮前北遺跡	集落	古代
110	犬塚遺跡	製鉄	古代
111	新中永窪遺跡	集落・須恵器窯 製鉄	古代
112	雷神遺跡	集落・生産	古代
113	山ノ上遺跡	散布地・生産	古代
114	作田山遺跡	製鉄	古代
115	内手B遺跡	製鉄・須恵器窯	古代

土器廃棄土坑からは墨書土器（「田」・「人」）が出土した（山田・藤田 2014）。

的場遺跡では、平成 23・25 年の調査で、9 世紀後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・焼成遺構が検出された（山田・藤田・佐伯 2014）。

内手遺跡では、平成 23 年の調査で、平安時代の木炭窯跡・横口付木炭窯跡が検出されている（初鹿野 2013b）。

上宮前北遺跡では、平成 24 年の調査で、平安時代の製鉄炉跡が検出されている（初鹿野 2013b）。

向山遺跡では、平成 25 年の調査で、奈良～平安時代の竪穴住居跡や鍛冶工房が検出されている（宮城県考古学会 2013、初鹿野 2015）。

熊の作遺跡では、平成 25・26 年の調査で、奈良時代～平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、門跡が検出され、「坂本願」「大領」「子弟」などの墨書土器や風字硯、石帯、木簡、木製品などが出土している（宮城県考古学会 2013、初鹿野 2014・2015、吉野 2015）。

北名生東窯跡では、昭和 37・38・52 年に須恵器窯跡の調査が行われ、8 世紀後半～9 世紀初頭の須恵器が出土した（鍛冶 1971）。

大塚遺跡では、平成 25・26 年の調査で、奈良時代の竪穴住居跡・木炭窯跡・製鉄炉跡が検出された（初鹿野 2015）。

新中永窪遺跡では、平成 26 年の調査で、奈良～平安時代初期の竪穴住居跡・製鉄炉跡・須恵器窯跡・木炭窯跡・横口付木炭窯跡が検出された（宮城県考古学会 2014、初鹿野 2015）。

雷神遺跡では、平成 25・26 年の調査で、奈良時代の竪穴住居跡が検出された。

内手 B 遺跡では、平成 26 年の試掘調査で、奈良時代の須恵器窯跡などが検出された。

作田山遺跡では、平成 25 年の試掘調査で、古代の製鉄関連遺構が検出された。

【中世の遺跡】

北経塚遺跡(10)、谷原遺跡(67)、日向遺跡(68)、山下館跡（41)、鷲足館跡(43)などがある。

北経塚遺跡では、平成 21・23 年の調査で、13 世紀後半～14 世紀以降の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑が確認され、中世の集落の存在が明らかになった（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。

谷原遺跡では、平成 22・24 年の調査で、掘立柱建物跡多数・井戸跡・土坑・溝跡などが検出され、中世の大規模な屋敷跡の存在が確認された（宮城県考古学会 2010・2012）。

日向遺跡では、平成 24 年の調査で、13 世紀後半～16 世紀の掘立柱建物跡・井戸跡が確認された（山田・藤田 2015）。

山下館跡では、平成 26 年に調査が行われ、平場・土塁・堀切が良好な状態で確認され、平場では掘立柱建物跡や柱穴列が検出された（宮城県考古学会 2014）。

鷲足館跡では、平成 24～26 年に調査が行われ、腰郭と柱穴列で区画された曲輪が確認され、掘立柱建物跡が多数検出された。

【近世の遺跡】

石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、山王 B 遺跡(82)、蓑首城跡(7)などがある。

石垣遺跡では、平成 23 年の調査で、近世の掘立柱建物跡・柱穴列跡・土坑・井戸跡で構成される屋敷跡が検出された（山田・藤田 2014）。

的場遺跡では、平成 23・25 年の調査で、17～19 世紀の掘立柱建物跡・土坑・溝跡・井戸跡で構成される屋敷跡が検出された（山田・藤田・佐伯 2014）。

山王 B 遺跡では、平成 22 年の調査で、掘立柱建物跡・溝跡・土坑が検出された（初鹿野ほか 2012）。

蓑首城跡は、戦国時代末期に築城され、元和2（1616）年以降、大條氏が長期間にわたり居城した城で、平成25・26年に二ノ丸跡の調査が行われ、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡などが検出された（宮城県考古学会 2013）。

3. 小平館跡の概要

小平館跡は、亘理郡山元町小平字舘・北に位置し、小平地区の鳳仙寺が所在する丘陵上に立地している。小平館跡については、延宝年間（1673～1681）編纂の『仙臺領古城書上』や享保13年（1728）編纂の『仙臺領古城書立之覚』に「小平城」、明和9年（1772）編纂の『封内風土記』に「古壘」として、下記のとおり記載されている。これらの文献によれば、小平館跡は小平村に所在する山城で、その規模は東西34間・南北11間の374坪、城主は小平兵衛とされている。

・『仙臺領古城書上』の記載内容

「小平村　山　一　小平城　同　三十四間　十一間　城主小平兵衛」

・『仙臺領古城書立之覚』の記載内容

「小平村　山　一　小平城　　東西三拾四間　南北十一間　三百七十四坪　右城主小平兵衛ト申者之由村老申聞候を以申上候」

・『封内風土記』の記載内容

「小平邑　古壘一。傳云。小平兵衛傳諱。不者所居。」

また、出典や詳細は不明であるが、大正6年（1917）に編纂された『亘理郡史』に、小平館跡の城主について以下のとおり記述されている。これによれば、館主は亘理館主であった亘理宗隆で、小平館に退隠して小平大閑斉と号し、伊達氏より長瀞、大畑、吉田、花釜、小平の5村を領有したとされている。

・『亘理郡史』第二十六章第二節の記載内容

「小平舘主　亘理宗隆氏

宗隆は千葉下總介常胤が三男武石三郎胤盛十四代の後胤にして伊達家に仕へ亘理の舘主たり宗隆二女あり一女は伊達植宗公に納れ側室と爲り元宗を生宗隆請ふて之を養ひ亘理家の嗣と爲す天正十九年遠田郡涌谷に移さる其の後宗隆致仕して亘理郡小平邑に退隠し小平を以て氏とし大閑齋と號す植宗公の内意に因り泉田式部景時が三男重隆を養ひ其の次女に配し以て小平家の嗣とす又宗隆は亘理郡大畑長瀞吉田花釜小平の五邑に於て高七千石の采地を領有す弘治二年七月二十一日歿す年六十四法名鳳仙院徹心大閑居士と稱し亘理郡小平邑鳳仙寺に葬る。

二代重隆小平兵衛遠江天正十五年六月十九日卒法名心嶺閑公居士三代小平修理元成は伊達政宗公に近侍し城州伏見在勤中文祿四年伊達家長屋に於て故あり市人を殺害し爲めに世襲の采地を沒収せらる此時政宗公に謁し内命を受け紀州高野山に隠れ居る三年密かに徴されて仙臺に歸るも武石二右衛門と稱す豊臣秀吉薨去の後更に召出され小平太郎左衛門と改稱せり寛永十三年五月二十四日政宗公薨し給ひ同年六月十九日仙臺屋敷に於て殉死す年六十一仙臺市瑞鳳殿政宗公廟の側に葬らる。

辭世　かさふれば六十のあまり夢さめて　君もろとも行く元の道

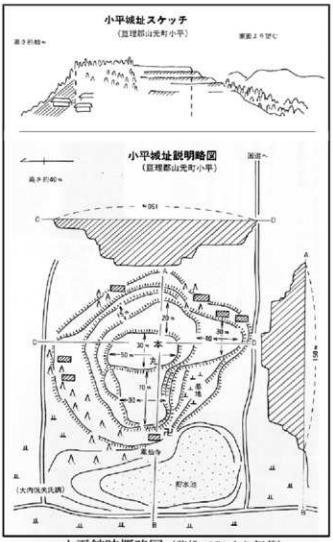
子孫を小平元勞と稱し現に神奈川縣鎌倉郡川口村片瀬に居住せり。」

この他、仙台領内の古城・館についてまとめた柴桃正隆氏によると、小平館跡は高さ40mほどの独立

形の円郭式山城で、東西 150m、南北 50m の平場が本丸、本丸を中心にして 5～6 段の壇がまわり、二の壇は特に広いことから二の丸の可能性を指摘している。また、その歴史については、古記などの記載から、小平館跡は亘理要害 14 世亘理宗隆が隠居したとされている館跡で、宗隆の一女が伊達稙宗の側室に迎えられている点から、室町時代の天文頃(1550 年頃)のものと推定している（紫桃 1974）。

以上が小平館跡に関する史料・文献類である。これらの記載をまとめると、小平館跡の館主には小平兵衛や亘理宗隆などの説があり、その年代は、亘理郡史の記載や紫桃氏の推定から 16 世紀半ば～後半の可能性が考えられるが、その築城時期については、さらなる検討が必要であると思われる。館跡の構造・遺構については、これまで本格的な発掘調査は実施されていないため、不明な点が多い。小平館跡の所在する丘陵は、現在、寺院・墓地・宅地・畑地などに利用され地形改変が著しく、かつ、丘陵頂部は雑木が生い茂る山林となっているため、現状で当時の館に関わる遺構を確認することは困難な状態にある。紫桃氏の踏査による概略図（第 4 図）と現在の地形図（第 5 図）を照らし合わせると、少なくとも、鳳仙寺墓地が所在する丘陵東側付近の頂部周辺に主郭・副郭が存在していたと考えられる。

なお、大正 5 年（1916）には、神奈川県から小平家の末裔が鳳仙寺に訪れ、開祖宗隆の 360 年の法要を行っており、鳳仙寺境内に小平家の墓碑が建立している（第 4 図）。



小平館跡概略図（紫桃 1974 より転載）

小平家の墓碑

（小平区鳳仙寺に所在）

第 4 図　小平館跡の概略図及び小平家の墓碑

第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過

1. 発掘調査に至る経緯

（1）事前協議

平成 24 年度の下半期に入り、宮城県亘理郡山元町小平地区の宅地造成事業箇所と埋蔵文化財のかかわりについて、㈱仙南ベニヤ株式会社（以下、事業主）から山元町教育委員会（以下、町教委）に照会があった。町教委では、事業予定箇所の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である「小平館跡」に該当していたことから（第 5 図）、事業主へ対し、事前の協議を行う旨の回答を行った。

平成 24 年 12 月 26 日、「宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が事業主から町教委に提出され、同日、町教委では意見書を付し、宮城県教育庁文化財保護課（以下、県教委）に協議書を進達した。これを受け、上記三者による現地確認・協議を行った結果、事業の実施により、遺跡へ与える影響が高いと判断されたことから、平成 25 年 1 月 9 日付け文第 2872 号・県教委通知により、事業用地内の遺構の分布状況を把握することを目的とした「確認調査」を実施する対応に決定した。その後、平成 25 年 2 月 1 日付で文化財保護法第 93 条に基づく発掘届出が提出（事業主→町教委→県教委）され（回答：平成 25 年 2 月 13 日文第 3233 号・県教委通知）、平成 25 年 2 月下旬から確認調査を実施することとなった。

（2）確認調査

確認調査は、平成 25 年 2 月 18 日・19 日の 2 日間実施した。調査主体は町教委である。調査は、事業計画地区内にトレンチを 22 箇所（T-1～22）設定して行い、遺構の有無を確認した。その結果、トレンチ 1・2・11・12・13・14・16・17・20・21 において遺構が検出され、事業計画範囲のほぼ全面に遺構が残存していること、小平館跡の範囲がさらに東側に広がることが判明した（第 5・10 図）。なお、遺構確認面は、現地表面から約 0.3～1.0m 下で確認された粘土質シルト土の地山上面である。

今回の宅地造成事業は、事業計画地が西から東へ緩やかに傾斜する平坦地であったことから、まず事業計画地内の現地表面に 0.3m～1.2m の盛土工事を行ったのち、専用住宅 22 区画分の建物建築・私道造成等を行う工法であった。したがって、工事計画と確認調査の結果から、事業用地内の遺構については、盛土工事に伴う擁壁設置箇所・隣接する現道と給排水管接続箇所以外は、切土による遺構削平は行われないことが判明した。この結果を受け、宮城県発掘調査基準（平成 12 年 4 月 1 日）に基づき、事業主・県教委・町教委の三者で再度協議した結果、遺構が確認された宅地造成地内の私道部分について、本格的な調査（事前調査）を行うこととなった。

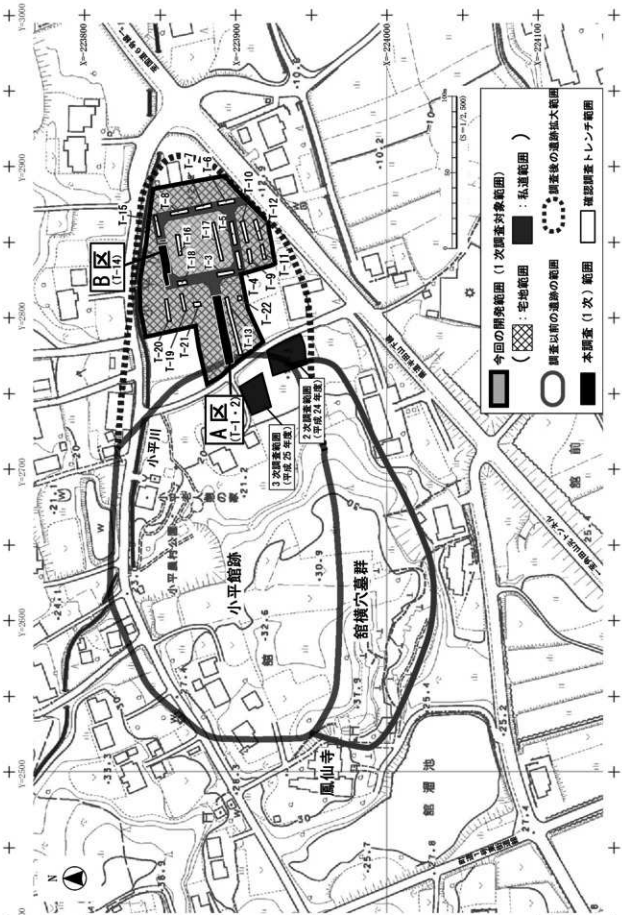
2. 小平館跡（1 次調査）発掘調査の経過

（1）事前調査（本発掘調査）の経過

小平館跡（1 次調査）の事前調査は、町教委が主体となり実施した。

事前調査（本発掘調査）は、平成 25 年 2 月 21 日～平成 25 年 3 月 1 日の 7 日間実施した。事前調査の対象となったのは、宅地造成計画用地のうち、私道部分である（第 5・10 図）。

調査面積は、調査対象となった事業計画面積の約 8,120 ㎡のうち、私道部分で遺構が確認された約 425 ㎡（A 区・B 区）である。調査にあたっては、事業主と事前調査に係る調整等を行った結果、工事着手



第５図　小平館跡（１次調査）調査区の位置

予定時期と役場の予算措置の関係から、発掘調査費用の補正予算措置は行わず、そのすべてを事業主直接負担とし、人件費・物品・重機等の資材の提供を受け、調査を進めることとした。

調査は、平成25年2月21日から表土除去を開始し、同日から遺構の検出・精査に着手した。2月26日にはB区、2月27日にはA区の遺構精査・写真撮影がほぼ完了した。2月28日には予備調査・断割調査・基本層序等の確認を行い、現地調査のすべてを完了した。その後、3月1日に調査現場の埋め戻しを行い、現地を事業主に引き渡した。小平館跡の発掘調査体制は、調査員2名、調査補助員2名、作業員のべ23名である。

発掘調査完了後、平成25年3月1日に遺失物法に基づく「埋蔵物発見届」を亘理警察署に提出し、3月4日には出土遺物の文化財認定に係る書類を県教委に提出した。また、今回の調査により、小平館跡の範囲が従来の範囲よりもさらに東側に広がることが判明したことから、遺跡の範囲拡大の手続きも併せて行った。

（2）整理・報告書作成作業の経過

小平館跡で出土した遺物、現地の記録類の整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後、山元町役場敷地内に設置した整理室内で行った。なお、現地調査を実施した平成24年度以降、東日本大震災に伴う復興事業等に関連する町内の発掘調査件数が急増したこともあり、本格的な整理作業については、平成26年度から開始し、報告書の作成・執筆は平成27年度に実施した。

具体的な作業内容は以下のとおりである。

【平成26年度の作業内容】

- 出土遺物の整理作業（洗浄・保存処理）
- 記録写真のネーミング
- 出土遺物の整理作業（接合・注記・復元）
- 出土遺物の実測図・拓本の作成、実測図のトレース、出土遺物の写真撮影
- 平面図、断面図の修正・トレース

【平成27年度の作業内容】

- 平面図・写真類の版組み
- 報告書執筆
- 出土遺物、記録類の収納

第Ⅲ章　発 掘 調 査

1. 基本層序

今回の調査区は、標高 12～17m の段丘上の緩やかな平坦面に位置する。調査区西部の標高が最も高く、そこから東にかけて緩やかに傾斜する。調査区の発掘調査実施前の土地利用状況は、畑地・原野である。

調査区の基本層序は、調査地点によって若干の相違はあるが、原則として上から現代の表土・耕作土（Ⅰ層）、現代の盛土（Ⅱ層）、旧表土（Ⅲ層）、地山（Ⅳ層）の順で構成される。遺構確認面はⅣa～c 層上面である。旧表土（Ⅲ層）は調査区のほぼ全域に分布している。遺構確認面である地山や遺構の残存状況から、今回の調査区については、一部で後世の削平を受けているが、基本的に本来の地形は残存しているものと考えられる。

それぞれの層の概要は以下のとおりである（第６図）。

Ⅰ層：現代の表土・耕作土。Ⅰa 層（表土）とⅠb 層（耕作土）に細別される。

・Ⅰa 層：褐色（10YR4/4）シルト土。層厚は 10cm 前後である。調査区西側で確認された。
・Ⅰb 層：暗褐色（10YR3/4）シルト土。層厚は 20cm 前後である。調査区東側で確認された。

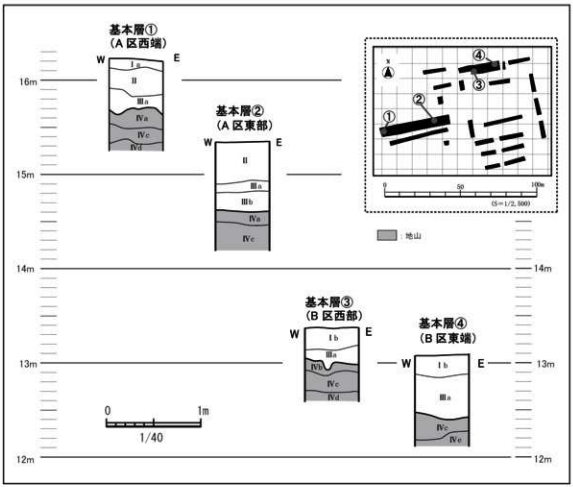
Ⅱ層：明黄褐色（2.5Y6/6）シルト土。調査区西側のみで認められた。層厚は 20～40cm 前後。地山起源の粒子を多く含む。現代の土地利用に伴う盛土である。

Ⅲ層：近世以降の遺物を含む層で、近世以降に形成された旧表土であると考えられる。調査区全域で認められ、調査区東側にいくにつれて厚く堆積していた。混入物・色調の差異から、Ⅲa・Ⅲb 層に細別され、Ⅲb 層→Ⅲa 層の順に堆積していた。層厚 10～40cm。

・Ⅲa 層：暗褐色（10YR3/3）シルト土。焼土粒子・炭化物片を含む。
・Ⅲb 層：褐色（10YR4/4）シルト土。焼土粒子・炭化物片・地山ブロック・小礫を含む。

Ⅳ層：地山。旧表土直下で確認された。各地点により異なる種類の地山が確認されたが、基本的にはⅣe 層→Ⅳd 層→Ⅳc 層→Ⅳb 層→Ⅳa 層の順に堆積していると思われる。

・Ⅳa 層：褐色（10YR4/6）粘土質シルト土による均一な層。
・Ⅳb 層：黄褐色（10YR5/8）粘土質シルト土。小礫を少量含む。
・Ⅳc 層：黄褐色（10YR5/8）粘土質シルト土。黄白色粘土、酸化鉄含む。
・Ⅳd 層：黄褐色（10YR5/8）粘土質シルト土による均一な層。
・Ⅳe 層：黄褐色（10YR5/8）粘土質シルト土。小礫を多く含む。



基本層①　北壁（南から撮影）

基本層②　北壁（南から撮影）

第６図　小平館跡（１次調査）A区・B区 基本層序

２.発掘調査の方法

今回の調査は、小平地区宅地造成工事に伴う発掘調査であり、本遺跡の現地調査・整理作業は下記の方法により行った。

（１）現地調査

【表土除去・遺構精査】

表土除去作業はバックホー（0.45 ㎥）、遺構検出以降の作業は人力により行った。なお、遺構検出作業については、基本層Ⅳa・b 層上面で行った。

【遺構測量】

検出した遺構や調査区の図面作成については、遺構平面図・等高線作成はトータルステーション(SRX5X)及び電子平板システム（遺構くん cubic 2011 7.02)、遺構断面図は手実測により縮尺 1／20 で実測した。その際、調査対象範囲に設置した国家座標系に基づく基準杭を利用した。測量基準杭の国家座標は例言に示したとおりである。

【遺構番号】

遺構番号は、現地調査の段階で、遺構ごとの性格を確認した上で、それぞれの遺構ごとに通し番号（P1～、SK1～、SD1～）を振り、各種記録類を作成した。なお、遺構の性格ごとの略記号については例言に示したとおりである。

【遺構の記録作成】

今回の調査で検出した遺構は、原則として、すべての記録作成（平面図・断面図・写真撮影）を行った。このうち、中世以降と判断される柱穴・ピット類は、調査を円滑に進めるため、遺構平面の下場計測を省略した。また、今回の調査で掘り込みを行った遺構の底面標高はすべて記録した。

【遺物の記録・取り上げ】

遺構から出土した遺物のうち、出土状況の平面記録の対象としたものは、遺構に伴う遺物でかつ残存状況のよいもののみとした。遺物の取り上げについては、原則として遺構出土遺物は出土層位ごと、遺構外出土遺物は検出面等として記録し取り上げた。ただし、遺構出土の遺物のうち、半裁時（分層前）に出土した遺物で出土層位が明確でないものは、「堆積土」として取り上げた。

【写真撮影】

記録写真には、一眼レフデジタルカメラ(NikonD90/レンズ AF-S　NIKKOR 18-200mm/画質モード RAW＋FINE)を使用した。

（２）室内整理

①遺物の整理作業

【遺物洗浄・接合・復元】

遺物の洗浄は、水洗により作業を行い、比較的脆い遺物（土師器）については、土器強化剤（使用薬剤：バインダー17）による処理を施した。遺物の接合は、まず同一遺構内の出土遺物の接合を行い、その後、別々の遺構間、その他（検出面・排土など）から出土した遺物の接合を行った。遺物の復元は、実測図作成が可能なものを対象として作業を行った。

【注記作業】

遺物の注記は、ジェットマーカー（第一合成株式会社）を一定期間リースし、機械による注記を行っ

た。遺物への注記内容は、原則として遺跡名の略号・調査年・出土遺構・出土層位とし、遺物の内面等に注記した。なお、注記した出土遺構名は、現場調査で付した番号とした。

【遺物抽出・実測図・拓本図作成】

遺物の抽出・実測図作成は調査員が行い、拓本作成は整理作業員、報告書用の拓本図作成は調査補助員が担当した。

遺物抽出に際しては、原則として遺構に伴う遺物を中心に抽出し、遺構に伴わないものや遺構外出土のものについても図化が可能なものは抽出の対象とした。

遺物の実測図については、原則として手実測により作成した。

拓本図の作成は、墨拓と画仙紙を使用し拓本を作成した後、スキャナーで PC に画像を取り込み、報告書掲載用に加工した。

【実測図トレース、写真撮影】

遺物の実測図のトレース図は、素図をスキャナーで取り込み、PC 上でのデジタルトレースを行い作成した。報告書に掲載する遺物の写真撮影・写真加工作業は、民間機関（株式会社アートプロフィール）に委託した。

②図面の整理・報告書作成

遺構図の整理作業は、平面図修正、断面図修正・トレース、土層注記等のデータ入力を行ったのち、図版作成、図面収納の手順で行った。報告書の執筆は、調査員が担当した。

なお、遺物・断面図のトレース図作成、写真画像処理、遺構図等の図版作成、報告書版組みについては、遺構くん cubic 2012 8.03、Adobe Illustrator CS5、Adobe Photoshop CS5・6、Adobe InDesign CS5・6、表データ・報告書原稿の作成については Microsoft Office Word ・Excel のソフトウェアを使用した。

3. 発見された遺構と遺物

今回の調査では、掘立柱建物跡 3 棟、溝跡 1 条、土坑 12 基、ピット 66 個を検出した(第 7～11 図)。出土遺物は、土師器、須恵器、石器である。以下、遺構ごとに記述する。

小平館跡（1 次調査）作業風景

小平館跡（1次調査）A区　完掘状況（西から撮影）

小平館跡（1次調査）A区　完掘状況（東から撮影）

第７図　小平館跡（１次調査）A区 調査区全景

小平館跡（1 次調査）B 区　完掘状況（西から撮影）

小平館跡（1 次調査）B 区　完掘状況（東から撮影）

第８図　小平館跡（１次調査）B区 調査区全景

小平館跡（1 次調査）T-16
遺構検出状況（東から撮影）

小平館跡（1 次調査）T-20
遺構検出状況（東から撮影）

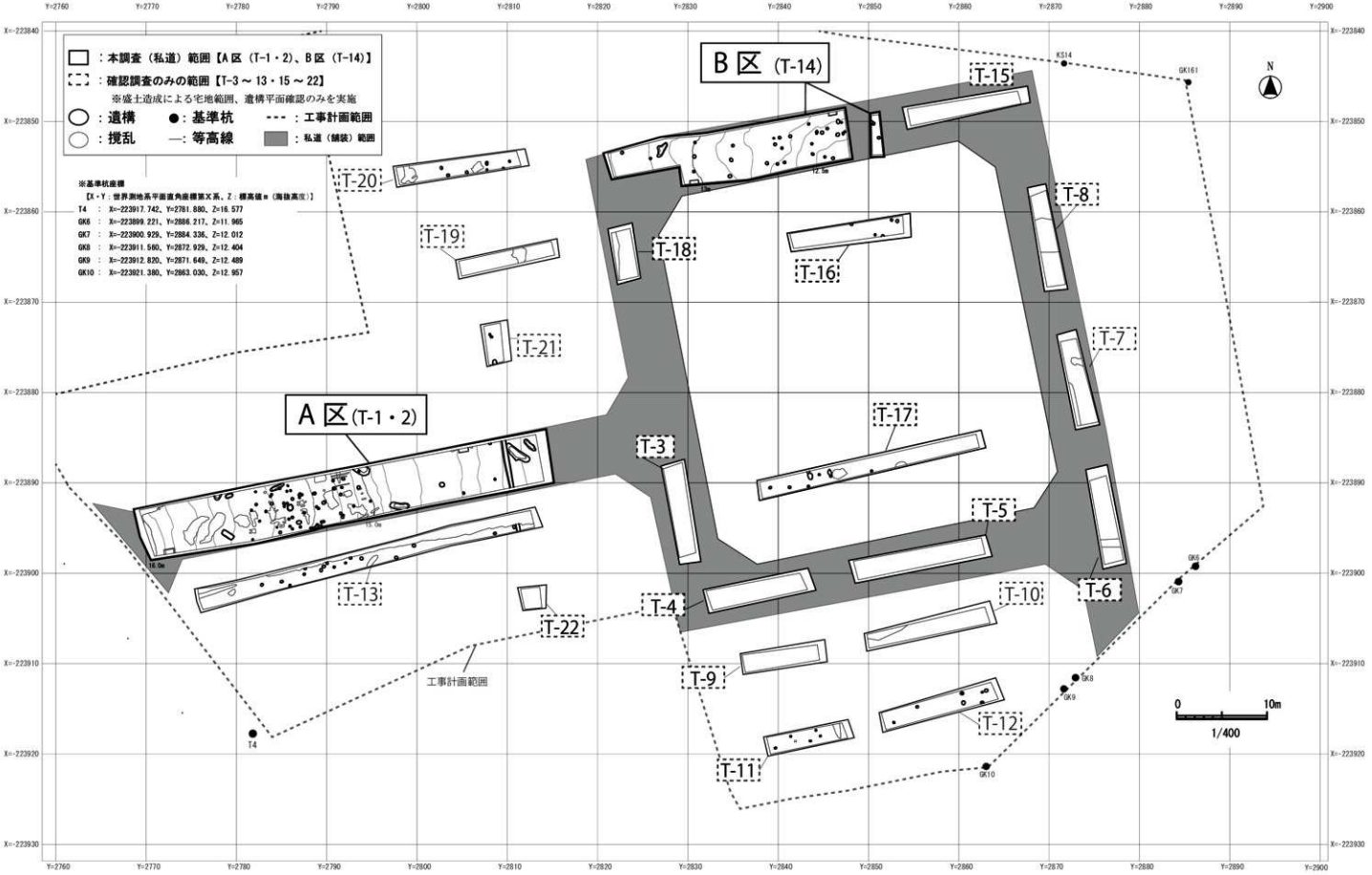
小平館跡（1 次調査）T-17
遺構検出状況（西から撮影）

小平館跡（1 次調査）T-13　遺構検出状況（東から撮影）

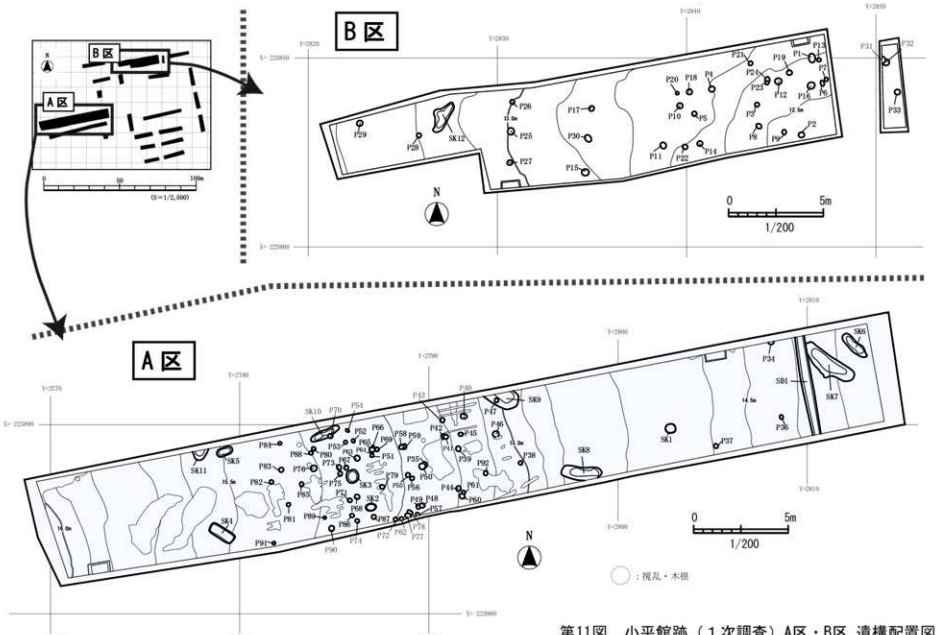
小平館跡（1 次調査）T-11
遺構検出状況（西から撮影）

小平館跡（1 次調査）T-12
遺構検出状況（西から撮影）

第９図　小平館跡（１次調査）確認調査トレンチ（T-11～13・16・17・20）全景



第10図　小平館跡（１次調査）調査区全体図



第11図　小平館跡（１次調査）A区・B区 遺構配置図

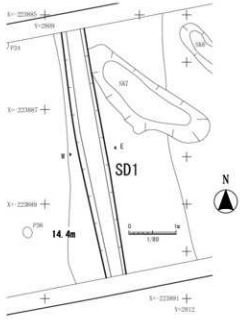
（1）溝跡

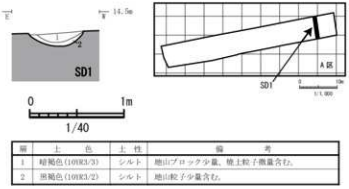
A 区東側で 1 条検出した。

【ＳＤ１溝跡】（第 12 図）

A 区東側の標高 14.4m の平坦面に立地する。確認面はⅣa 層である。SK7 土坑と重複し、これより新しい。南北方向に延びる溝で、溝の北部・南部は調査区外へ続いている。検出長は約 5.2m で、上幅 50～56cm、下幅 20～30cm、深さ 10～13cm である。底面の標高は溝の南部が高く、北部が低い。溝の短軸方向の断面形はＵ字形で、堆積土は 2 層に分かれいずれも自然堆積である。遺物は 1 層からロクロ成形の土師器坏片 7 点（内黒 4 点・赤焼 3 点、25g）・甕片 1 点（5g）が出土した。

溝跡は、A 区東側以外にも確認調査時の T13・21 においても確認されており（第 10 図）、少なくとも南北 19m 程度の溝跡であると考えられる。





層	上　色	土　性	備　考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック少量、焼土粒子微量含む。
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒子少量含む。

SD1 溝跡　断面（北から）

SD1 溝跡　完掘状況（北から）

第12図　ＳＤ１　溝跡

（2）土坑

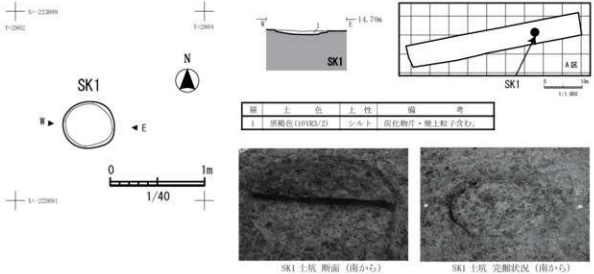
土坑はＡ区で 11 基（SK1～11）、Ｂ区１基（SK12）、合計 12 基検出した。それぞれの特徴等については第２表にまとめた。

第2表　小平館跡（1次調査）　土坑　属性表

遺構No.	平面形	規模 (m)	深さ (cm)	断面形	堆積土	出土遺物	備考
SK 1	円形	0.56×0.48	3	皿状	自然堆積	—	
SK 2	楕円形	0.56×0.40	4	皿状	自然堆積	土師器	
SK 3	円形	0.69×0.62	18	U字形	自然堆積	—	
SK 4	隅丸長方形	1.40×0.60	30	逆台形	人為堆積	—	
SK 5	楕円形	0.84×0.44	26	U字形	人為堆積	—	
SK 6	隅丸長方形	1.69×0.48	14	皿状	自然堆積	—	平面形やや不整形。
SK 7	隅丸長方形	3.01×1.04	54	皿状	自然堆積	—	平面形やや不整形。SB1より古い。
SK 8	隅丸長方形	2.11×0.66	26	皿状	自然堆積	—	平面形やや不整形。土坑南東部調査区外へ延びる。
SK 9	隅丸長方形？	(1.15)×1.05	22	皿状	自然堆積	—	P47より古い。土坑北側調査区外へ延びる。
SK 10	長楕円形	1.62×0.43	13	皿状	人為堆積	—	SB3・P70より古い。
SK 11	—	0.94×(0.58)	40	不整形	自然堆積	—	土坑北側調査区外へ延びる。
SK 12	不整形	1.60×0.42～0.83	10	皿状	自然堆積	—	

【ＳＫ１土坑】（第 13 図・第２表）

Ａ区東側の標高 14.6～14.7m の平坦面に立地する。確認面はⅣa 層である。平面形は長軸 0.56m、短軸 0.48m の東西方向に長軸をもつ円形を呈し、深さは 3cm である。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は１層で、焼土粒子・炭化物片を含む自然堆積層である。遺物は出土していない。



SK1 土坑 断面（南から）　　SK1 土坑 完掘状況（南から）

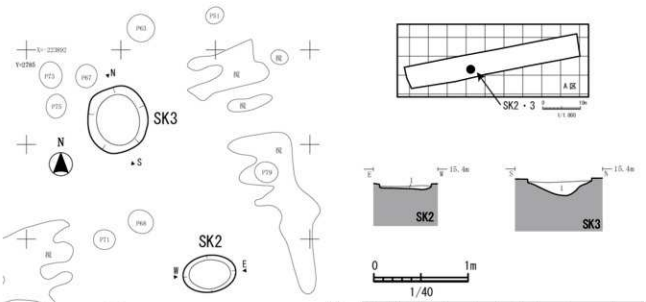
第13図　ＳＫ１　土坑

【ＳＫ２土坑】（第 14・34 図・第 2 表）

A 区中央の標高 15.4m の平坦面に立地する。確認面はⅣa 層である。平面形は長軸 0.56m、短軸 0.40m の東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは 4cm である。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 1 層で、自然堆積である。遺物は 1 層から土師器坏（赤焼土器）破片 3 点（10g）、高台付坏破片（第 34 図 2）1 点（10g）出土した。

【ＳＫ３土坑】（第 14 図・第 2 表）

A 区中央の標高 15.4m の平坦面に立地する。確認面はⅣa 層である。平面形は長軸 0.69m、短軸 0.62m の南北方向に長軸をもつ円形を呈し、深さは 18cm である。長軸方向の断面形は U 字形である。堆積土は 1 層で、自然堆積である。遺物は出土していない。



遺構名	層	土　色	土 性	備　考
SK2	1	褐褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック少量含む。
SK3	1	褐色(7.5YR4/3)	シルト	地山ブロック・炭化物片少量含む。

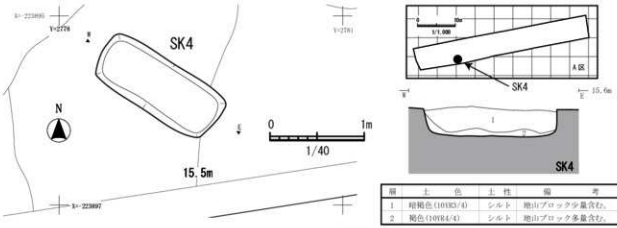
SK2 土坑 断面（北から）

SK3 土坑 断面（東から）

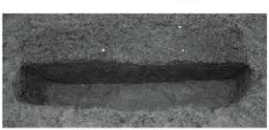
第14図　ＳＫ２・３　土坑

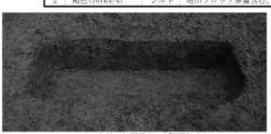
【ＳＫ４土坑】（第 15 図・第 2 表）

A 区西側の標高 15.5m の平坦面に立地する。確認面はⅣa 層である。平面形は長軸 1.40m、短軸 0.60m の東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは 30cm である。長軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも地山ブロックを含む人為堆積層である。遺物は出土していない。



層	土　色	土 性	備　　考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック少量含む。
2	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック多量含む。

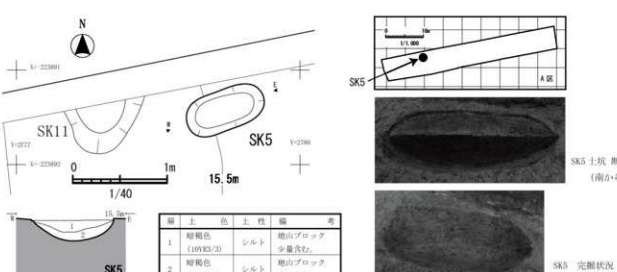

SK4 土坑　断面（南西から）


SK4 土坑　完掘状況（南西から）

第15図　ＳＫ４　土坑

【ＳＫ５土坑】（第 16 図・第 2 表）

A 区西側の標高 15.5m の平坦面に立地する。確認面はⅣa 層である。平面形は長軸 0.84m、短軸 0.44m の東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは 26cm である。長軸方向の断面形は U 字形である。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも地山ブロックを含む人為堆積層である。遺物は出土していない。



層	土　色	土 性	備　　考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック少量含む。
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック多量含む。

SK5 土坑　断面（南から）

SK5　完掘状況（南から）

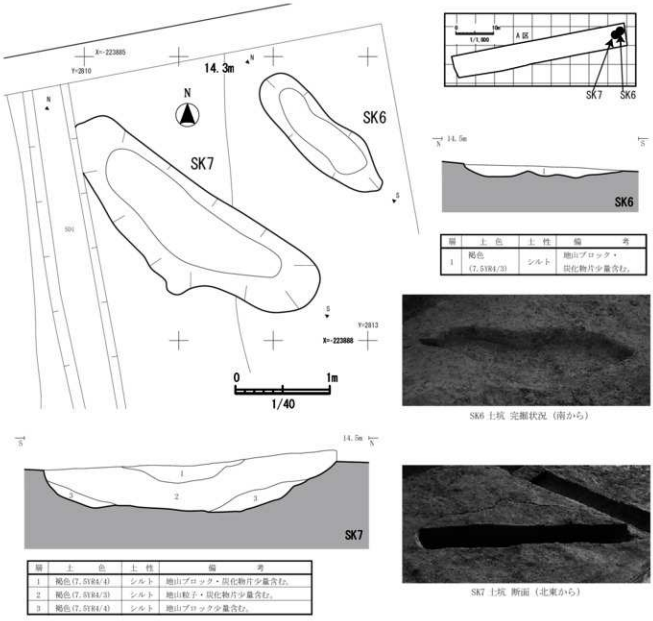
第16図　ＳＫ５　土坑

【ＳＫ６土坑】（第 17 図・第２表）

Ａ区東端の標高 14.3m の平坦面に立地する。確認面はⅣa 層である。平面形は長軸 1.69m、短軸 0.48m の東西方向に長軸をもつやや不整形な隅丸長方形を呈し、深さは 14cm である。長軸方向の断面形は皿状で、底面には凹凸がある。堆積土は１層で、自然堆積である。遺物は出土していない。

【ＳＫ７土坑】（第 17 図・第２表）

Ａ区東端の標高 14.3m の平坦面に立地する。確認面はⅣa 層である。SD1 溝跡と重複し、これより古い。平面形は長軸 3.01m、短軸 1.04m の東西方向に長軸をもつやや不整形な隅丸長方形を呈し、深さは 54cm である。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



層	土　色	土　性	備　　考
1	褐色（7.5YR4/3）	シルト	地山ブロック・炭化物片少量含む。

SK6 土坑　完掘状況（南から）

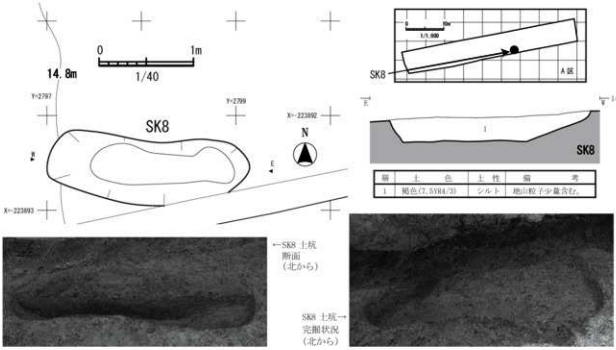
層	土　色	土　性	備　　考
1	褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山ブロック・炭化物片少量含む。
2	褐色(7.5YR4/3)	シルト	地山粒子・炭化物片少量含む。
3	褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山ブロック少量含む。

SK7 土坑　断面（北東から）

第17図　ＳＫ６・７　土坑

【ＳＫ８土坑】（第 18 図・第 2 表）

Ａ区西端の標高 14.8m の平坦面に立地する。確認面はⅣa 層である。土坑南東部の一部は調査区外へ延びる。平面形は長軸 2.11m、短軸 0.66m の東西方向に長軸をもつやや不整形な隅丸長方形を呈し、深さは 26cm である。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 1 層で、自然堆積である。遺物は出土していない。

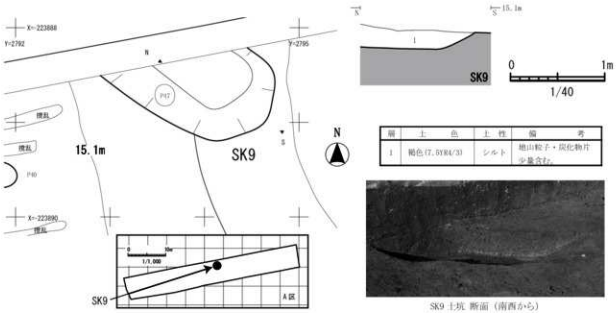


層	土　色	土 性	備　　考
1	褐色(7.5YR4/3)	シルト	地山粒子少量含む。

第18図　ＳＫ８　土坑

【ＳＫ９土坑】（第 19 図・第 2 表）

Ａ区中央の標高 15.0m の平坦面に立地する。確認面はⅣa 層である。P47 と重複し、これより古い。土坑北側は調査区外へ延びる。平面形は長軸 1.15m 以上、短軸 1.05m の東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈すると思われる。深さは 22cm である。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 1 層で、自然堆積である。遺物は出土していない。



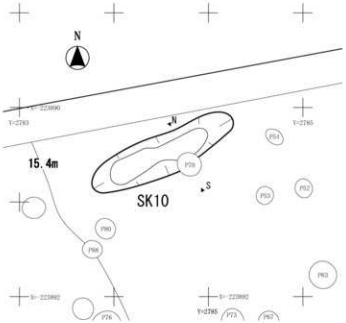
層	土　色	土 性	備　　考
1	褐色(7.5YR4/3)	シルト	地山粒子・炭化物片少量含む。

SK9 土坑 断面（南西から）

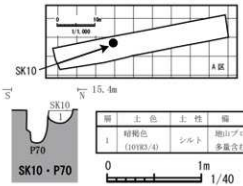
第19図　ＳＫ９　土坑

【ＳＫ10 土坑】（第 20 図・第 2 表）

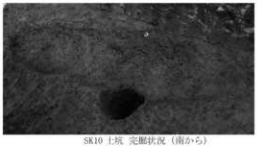
A 区中央やや西側の標高 15.4m の平坦面に立地する。確認面はⅣa 層である。SB3・P70 と重複し、これより古い。平面形は長軸 1.62m、短軸 0.43m の東西方向に長軸をもつ長楕円形を呈し、深さは 13cm である。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 1 層で、人為堆積である。遺物は出土していない。



第20図　ＳＫ１０　土坑



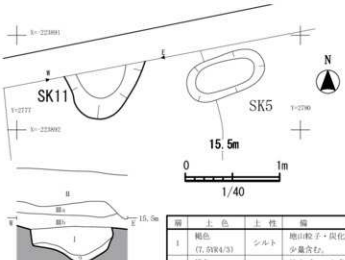
層	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロック多量含む。



SK10 土坑 完掘状況（南から）

【ＳＫ11 土坑】（第 21 図・第 2 表）

A 区西側の標高 15.5m の平坦面に立地する。確認面はⅣa 層である。土坑北側は調査区外へ延びる。平面形は東西 0.94m、南北 0.58m 以上、深さは 40cm である。東西方向の断面形は不整形で、底面には凹みがある。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



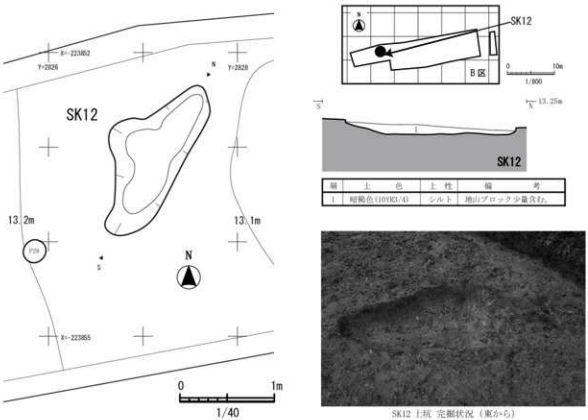
層	土色	土性	備考
1	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	地山粒子・炭化物片少量含む。
2	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	地山ブロック多量含む。

SK11 土坑 断面（南から）

第21図　ＳＫ１１　土坑

【ＳＫ12 土坑】（第 22 図・第 2 表）

Ｂ区西側の標高 13.1m の平坦面に立地する。確認面はⅣb 層である。平面形は長軸 1.60m、短軸 0.42～0.83m の南北方向に長軸をもつ不整形を呈し、深さは 10cm である。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 1 層で、自然堆積である。遺物は出土していない。



層	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック少量含む

SK12 土坑　完掘状況（東から）

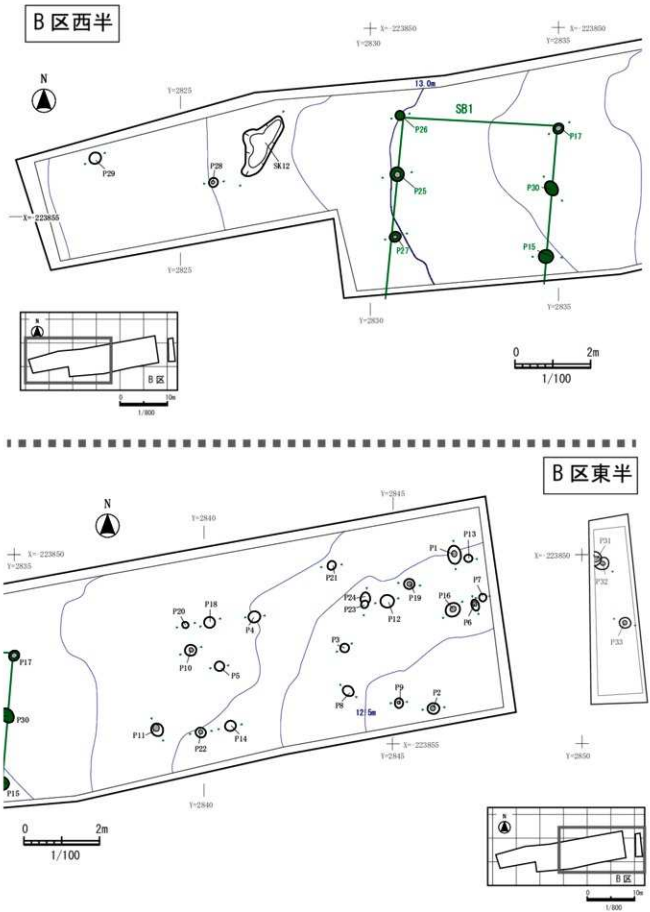
第22図　ＳＫ１２　土坑

（３）ピット・掘立柱建物跡（第 23～33 図・第 3～5 表）

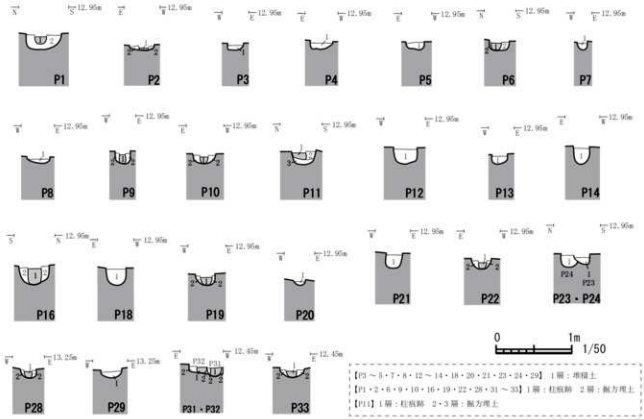
①ピットの特徴と出土遺物

ピットは、92 個検出した（第 23～29 図）。確認面はＡ区ではⅣa 層、Ｂ区ではⅣb・c 層である。それぞれの規模、柱痕跡の有無、堆積土・埋土、重複関係等の特徴については、第 3～5 表にまとめた。ピットは、長軸 13～45cm、短軸 12～35cm の円形・楕円形を呈し、深さは 4～50cm である。検出した 92 個のうち、48 個で直径 8～23cm の円形・楕円形の柱痕跡を確認した。これらのピットの埋土・堆積土は黒褐色・暗褐色シルト土を主体とし、Ａ区中央部付近・Ｂ区のほぼ全域に分布する。また、確認調査時の T-11～13・16・17・20・21 でも確認した（第 10 図）。

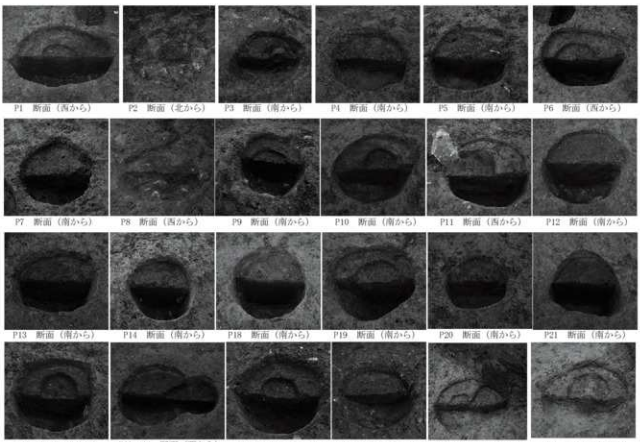
遺物は、P1 柱痕跡・掘方埋土からロクロ成形の土師器坏片 3 点（5ｇ）・甕片 4 点（10g）、須恵器壺片 1 点（5g）、P14 堆積土からロクロ成形の土師器甕片 1 点（5g）、P24 堆積土から内黒処理を施したロクロ成形の土師器坏片 1 点（5g）（第 34 図 1）出土した（第 3 表）。



第23図　小平館跡（１次調査）B区 遺構配置図

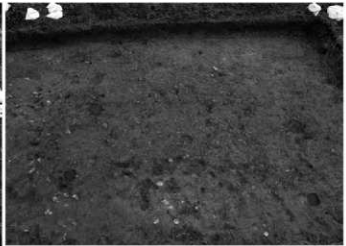


柱穴・ピット断面図（掘立柱建物跡以外）



第24図　小平館跡（1次調査）B区　柱穴・ピット断面

小平館跡（1 次調査）B 区西側
柱穴・ピット検出状況（西から）



小平館跡（1 次調査）B 区中央
柱穴・ピット検出状況（北から）

小平館跡（1 次調査）B 区東半　柱穴・ピット検出状況（北から）

第25図　小平館跡（1次調査）B区　柱穴・ピット検出状況

第3表　小平館跡（1次調査）　柱穴・ピット　属性表　※掘立柱建物跡以外

遺構	種類	柱穴・ピット属方（長軸・短軸 m、深さ単位 m）						柱痕跡				切り合い	備考
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土・陸土	平面形	長軸	短軸	埋土		
P1	柱穴	楕円形	40	30	20	12.3	2.5a	楕円形	17	14	24	い	土師器、須恵器
P2	柱穴	円形	32	31	4	12.3	6.6a	円形	14	12	24	あ	
P3	小穴	円形	32	23	8	12.4	3.5a	—	—	—	—		
P4	小穴	円形	36	36	8	12.4	3.6a	—	—	—	—		
P5	小穴	円形	32	21	10	12.4	3.6a	—	—	—	—		
P6	柱穴	楕円形	26	26	14	12.4	5.0a	円形	12	11	24	あ	
P7	小穴	円形	38	36	8	12.4	3.6a	—	—	—	—		
P8	小穴	円形	30	25	4	12.4	3.6a＋g	—	—	—	—		埋m 埋土粘子微量
P9	柱穴	円形	34	32	16	12.3	3.6a＋g	円形	8	8	24	あ	埋m 埋土粘子微量
P10	柱穴	円形	28	26	12	12.4	3.6a＋g	円形	12	10	24	あ	埋m 炭片少量
P11	柱穴	円形	31	30	18	12.4	新埋1:3.6a 新埋2:4.6a	円形	10	10	24	い	
P12	柱穴	円形	34	31	21	12.3	3.6a 陸:7.6a	—	—	—	—		柱痕跡 埋m 炭片、 埋土粘子微量
P13	小穴	円形	36	17	10	12.4	3.6a	—	—	—	—		
P14	小穴	円形	35	24	22	12.3	3.6a	—	—	—	—		土師器
P16	柱穴	円形	37	35	23	12.3	6.6a＋g	円形	17	14	24	あ	埋m 炭片少量
P18	小穴	円形	28	26	24	12.3	3.6a＋g	—	—	—	—		埋m 炭片微量
P19	柱穴	円形	36	26	13	12.4	6.6a	円形	14	13	24	あ	
P20	小穴	円形	36	18	8	12.3	3.6a＋g	—	—	—	—		埋m 炭片微量
P21	小穴	円形	37	21	18	12.4	3.6a＋g	—	—	—	—		埋m 炭片、 埋土粘子微量
P22	柱穴	円形	25	25	14	12.4	3.6a＋g	円形	11	11	24	あ	埋m 炭片、 埋土粘子微量
P23	小穴	円形	37	19	17	12.4	3.6a	—	—	—	—		P24と平面
P24	小穴	円形？	28	120	16	12.4	3.6a＋g	—	—	—	—		P23と平面 埋m 炭片、 埋土粘子少量
P26	柱穴	円形	34	34	10	12.9	3.6a＋g	円形	9	8	24	あ	埋m 炭片少量
P28	小穴	円形	27	26	8	12.9	3.6a＋g	—	—	—	—		埋m 炭片微量
P31	柱穴	円形？	35	口42	23	12.1	3.6a	楕円形？	16	口16	24	あ	P32と平面
P32	柱穴？	円形？	35	口30	16	12.1	3.6a＋g	楕円形	15	13	24	あ	P31と平面 埋m 炭片、 埋土粘子少量
P33	柱穴	円形	36	27	10	12.1	3.6a	円形	15	12	24	あ	
P34	小穴	円形？	25	口25	23	12.3	3.6a＋g	—	—	—	—		埋m 炭片、 埋土粘子少量
P35	柱穴	円形？	36	口30	28	12.3	切り:3.6a 新埋:6.6a	楕円形？	9	口9	24	あ	P36と平面 柱切取
P36	小穴	円形	36	18	8	12.7	3.6a	—	—	—	—		
P37	柱穴	円形	32	30	10	12.4	6.6a	楕円形	12	10	24	あ	
P38	柱穴	円形	32	30	21	12.4	6.6a	楕円形	11	8	24	う	
P39	柱穴	円形	36	25	36	12.9	3.6a	円形	14	13	24	あ	
P40	柱穴	円形	32	28	20	12.9	3.6a	楕円形	16	13	24	あ	
P42	小穴	円形？	25	口12	21	12.9	3.6a	—	—	—	—		SK29より古
P44	柱穴	円形	37	34	40	12.7	3.6a	円形	15	12	24	あ	
P45	柱穴	円形	31	19	15	12.9	3.6a	楕円形	10	12	24	あ	
P46	柱穴	円形	32	29	41	12.3	切り:3.6a 新埋1:6.6a 新埋2:3.6a	楕円形	25	12	24	い	柱切取
P47	柱穴	円形	32	24	25	12.3	6.6a	円形	12	12	24	あ	SK24と平面
P50	柱穴	円形	34	32	30	12.9	3.6a	円形	22	20	24	あ	P51と平面
P52	小穴	円形	19	18	16	12.9	3.6a	—	—	—	—		
P54	小穴	円形	18	15	11	12.9	3.6a	—	—	—	—		
P55	柱穴	円形	35	24	15	12.9	3.6a	円形	9	8	24	あ	
P57	小穴	円形？	口71	17	11	12.9	3.6a	—	—	—	—		
P61	小穴	円形	18	18	10	12.9	3.6a	—	—	—	—		SK29より古
P62	柱穴	円形	30	18	28	12.9	3.6a	楕円形	12	10	24	あ	
P64	小穴	円形？	口61	18	13	12.1	3.6a	—	—	—	—		P65と平面
P65	柱穴	円形	32	22	23	12.9	切り:3.6a 新埋:7.6a	楕円形	10	11	24	あ	P64と平面 柱切取
P66	小穴	円形	15	17	17	12.9	3.6a	—	—	—	—		
P67	小穴	円形	21	21	22	12.9	3.6a	—	—	—	—		
P68	小穴	円形	24	21	15	12.1	3.6b	—	—	—	—		
P69	小穴	円形	30	26	12	12.9	3.6a	—	—	—	—		
P74	小穴	円形	23	21	27	12.9	3.6a	—	—	—	—		
P75	柱穴	円形	30	21	28	12.9	3.6a	円形	10	10	24	あ	
P76	小穴	円形？	25	口40	13	12.9	3.6a	—	—	—	—		P79と平面 埋m 炭片、 埋土粘子少量
P78	小穴	円形？	25	口40	13	12.9	3.6a	—	—	—	—		P77と平面

遺構	種類	柱穴・ピット属方（長軸・短軸 m、深さ単位 m）						柱痕跡				切り合い	備考
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土・陸土	平面形	長軸	短軸	埋土		
P80	小穴	円形	28	26	40	12.3	3.6a	—	—	—	—		
P81	柱穴	円形	28	26	28	12.3	3.6a	円形	12	11	24	あ	
P82	柱穴	円形	21	20	30	12.3	3.6a	円形	12	12	24	あ	
P83	柱穴	円形	25	23	30	12.1	6.6a	円形	13	13	24	あ	
P84	柱穴	円形	29	19	26	12.6	3.6b	円形	10	11	24	あ	
P85	柱穴	円形	22	22	30	12.2	6.6a	楕円形	11	9	24	い	
P86	小穴	円形	26	25	40	12.1	3.6a	—	—	—	—		
P87	小穴	円形	17	17	30	12.0	3.6a	—	—	—	—		
P88	小穴	円形	26	25	40	12.1	3.6a	—	—	—	—		
P89	小穴	円形	28	26	15.3	3.6a	—	—	—	—	—		
P90	小穴	円形	26	26	15.3	3.6a	円形	12	11	24	あ		
P91	小穴	円形	18	18	15.3	3.6a＋g	円形	8	8	24	あ		
P92	小穴	円形	17	17	15.0	3.6a	—	—	—	—	—		
P93	小穴	円形	25	18	15.3	3.6a＋g	—	—	—	—	—		埋m 炭片微量
P95	小穴	楕円形	25	18	16.7	3.6a	—	—	—	—	—		

●ピット（柱穴・小穴）類型

【柱類型】

あ：柱痕跡が柱穴掘方底面に残するもの

い：柱痕跡が柱穴掘方底面まで至らないもの

う：柱痕跡が柱穴掘方底面よりさらに下工層に達するもの

【柱痕跡・埋方の埋土・陸埋土類型】

■土色

1：黒褐色（10YR2/2）　2：暗褐色（10YR3/3）　3：暗褐色（10YR3/4）
4：にぶい黄褐色（10YR4/3）　5：褐色（10YR4/4）　6：褐色（10YR4/6）

■土性

a：シルト

■混入物

a：地山ブロック多く含む　b：地山ブロック含む　c：地山ブロック少量含む
d：地山ブロック微量含む　e：地山粒子含む　f：地山粒子微量含む
g：その他（上記以外のもの含）

※g を選択した場合は微考欄に埋積土混入物を記載
※微考欄の関係から、下記の内容については記載を省略した
混化物片→炭片

【記載例】

14a・・・・上色：黒褐色（10YR2/1）、土性：シルト、混入物：地山ブロック多く含む

●その他の記載事項

■柱穴・ピットの計測値

・（数値）は推定値を示す

■「柱穴・ピット属欄の「埋土・陸土（埋積土）」記載事項

・柱穴の場合は「埋方埋土」を記載する

・「1 層・2 層」等の記載：「柱穴・小穴」の埋土等が 2 層以上に分様した場合を示す

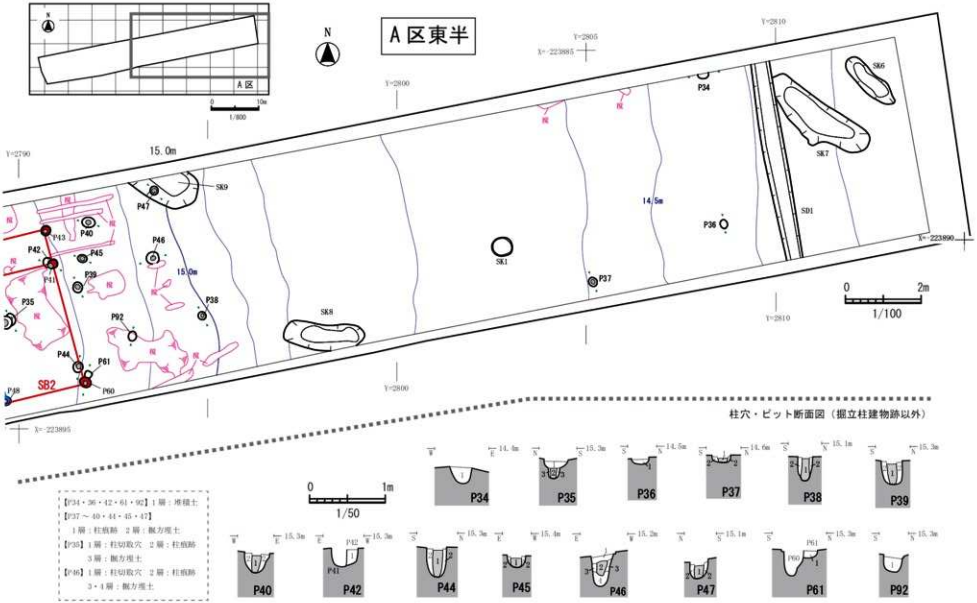
・「抜穴」：柱抜き取り穴の埋土・埋積土／「抜穴 1」：抜き取り穴 1 層の埋土・埋積土

・「切穴」：柱切り取り穴の埋土・埋積土／「切穴 1」：切き取り穴 1 層の埋土・埋積土

■微考欄の記載事項

・柱抜取：柱が抜き取られているもの　・柱切取：柱が切り取られているもの

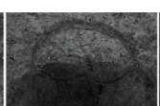
・この他、重複関係・出土遺物を記載



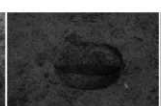
第26図　小平館跡（１次調査）A区東半 柱穴・ピット 遺構配置図・断面図

小平館跡（1次調査）A区東半　柱穴・ピット検出状況（北西から）

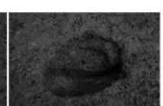
P34　断面（南から）



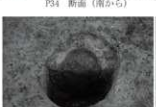
P35　断面（西から）



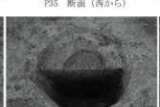
P36　断面（東から）



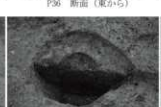
P37　断面（東から）



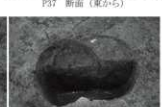
P38　断面（東から）



P39　断面（東から）



P40　断面（南から）



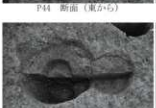
P42（右）　断面（北から）

P44　断面（東から）

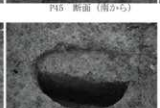
P45　断面（南から）

P46　断面（北から）

P47　断面（西から）



P61（右）　断面（東から）



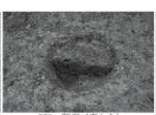
P92　断面（東から）

第27図　小平館跡（1次調査）A区東半
柱穴・ピット検出状況、断面

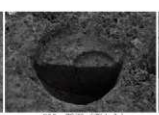
第28図　小平館跡（1次調査）A区西半 柱穴・ピット 遺構配置図・断面図

小平館跡（1次調査）A区西半　柱穴・ピット検出状況（北から）

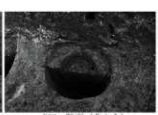
P50　断面（東から）



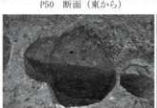
P53　断面（東から）



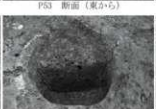
P55　断面（西から）



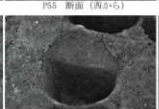
P62　断面（北から）



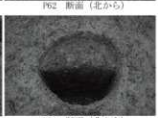
P64（左）・65（右）　断面（東から）



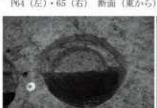
P67　断面（北から）



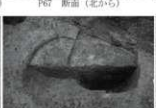
P69　断面（東から）



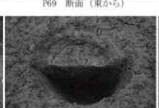
P74　断面（北から）



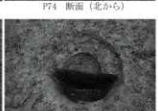
P75　断面（西から）



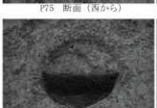
P77（左）・P78（右）　断面（北から）



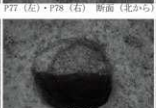
P81　断面（東から）



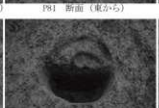
P82　断面（西から）



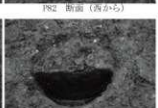
P83　断面（西から）



P84　断面（南から）



P85　断面（南から）



P89　断面（南から）

第29図　小平館跡（1次調査）A区西半　柱穴・ピット検出状況、断面

②掘立柱建物跡（第23・28・30～33図・第4・5表）

ピットには、前述のとおり柱痕跡が認められる「柱穴跡」と、柱痕跡が認められない「小穴跡」があり、これらはいずれもある一定の範囲内に分布していることから、掘立柱建物や柱穴列などを構成する柱穴跡であった可能性が高いと考えられる。しかしながら、今回の調査区は調査面積が限られているため、掘立柱建物跡として認定できたものは3棟（SB1～3）のみである（建物として認定できなかったピット・柱穴は66個）。

第4表　小平館跡(1次調査)　掘立柱建物跡　属性表

遺構No.	建物間数 桁行	建物間数 梁行	棟方向	平面規模 桁行総長(m)/測定柱列/柱間寸法(m)			平面規模 梁行総長(m)/測定柱列/柱間寸法(m)			建物の方向 建物軸斜角度/真北基準		備考
SB1	2以上	1	南北	3.2以上	西	1.6＋1.6＋～	4.2	北	4.2	東6°	N-6°-E	構成Pit： P15・17・25・26・27・30 建物調査区外に延びる
SB2	3	(1)＋1	東西	7.2	南	2.4＋2.4＋2.4	4.1 [4.9]	西	**0.8＋**4.1	西15°	N-15°-W	構成Pit： P41・43・49・52・59・60・ P63・76・87・88・90 SB3より古，P42・64より新 身舎北側に庇付く
SB3	3	2	南北	(5.3)	西	1.7＋1.8＋(1.8)	(3.4)	北	(1.8)＋1.6	西20°	N-20°-W	構成Pit： P48・51・56・58・70・71・72・73・79 SB2・SK10より新 建物の一部調査区外に延びる

※建物間数の欄で「2＋(1)」とあるのは「身舎2間，南側または東側に庇（または張出し）1間」，「(1)＋2」とあるのは「身舎1間，北側または西側に庇（または張出し）2間」であることを示す。
※平面規模の（ ）内の数値は推定値を示す。
※平面規模の桁行・梁行総長の数値は柱間を「身舎部分の総長」を示した。このうち，庇・張出しの付く建物については，その下段の〔 〕内に庇・張出しを含めた総長を表記した。
※柱間寸法は，東西方向のものは西から，南北方向のものは北から順に記した。　柱間寸法の**ゴシック体数字**は庇または張出しの柱間寸法を示す。
※建物が調査区外に延びているため，規模が不明な建物や柱の一部が残存していない建物については，下記のとおり表記した。

○調査区内に延びる建物・・・建物間数：「●以上×1間」，平面規模：総長を「m以上」と表記，柱間寸法：「●＋●＋～」と表記。
○柱穴の一部が残存していない建物・・・総長・柱間寸法のうち，実測の計測値は●，推定値は（●）とし，総長「●」，「●＋（●）＋（●）」と表記。

第5表　小平館跡(1次調査)　掘立柱建物跡　柱穴　属性表

遺構番号		柱穴跡 平面形（直径・短軸・長軸 m）	柱穴跡 赤彩	柱穴跡 形態	柱穴跡 最高標高	柱穴跡 埋土	柱痕跡 平面形	柱痕跡 形態	柱痕跡 埋土	柱穴型	備考（建物・出土遺物等）
SB1	P13	円形	24	36	14	12.6	長円24cm・g	－	－	－	埋g：炭片少量，粒径数
	P17	円形	23	24	17	12.5	24cc	円形	17	14	23	赤
	P15	円形	24	32	45	12.4	32cc	円形	17	16	23	赤
	P26	楕円形	23	22	13	12.7	楕円24cm・g	－	－	－	－	埋g：炭片微量，粒径数
	P27	楕円形	28	22	5	12.8	46cc	円形	12	10	23	赤
	P30	楕円形	28	28	40	12.5	長円35cm・g	－	－	－	－	埋粒数 埋g：炭片微量
SB2	P41	円形	24	26	23	14.8	26cc	楕円形	14	12	23	赤	P42より新
	P43	円形	23	24	23	14.9	26cc	円形	11	11	23	赤	
	P49	円形？	28	(16)	20	14.9	26cc	円形	14	14	23	赤	SB2P43より古
	P52	円形	20	16	14	15.0	長円24cc	－	－	－	－	粒数	
	P59	円形？	27	(12)	25	14.9	長円26cc	－	－	－	－	SB2P58より古，粒数	
	P60	円形	26	28	23	14.7	26cc	楕円形	12	10	23	赤	P61より新
	P63	円形	23	22	23	14.9	長軸24cc 短軸23cc	楕円形	11	9	23	赤	
	P76	円形	21	20	26	14.9	24cc・g	円形	15	14	23	赤	埋g：炭片微量
	P87	円形	20	20	42	14.9	24cc	円形	11	10	23	赤	
	P88	円形	21	20	28	15.0	長円22cc	－	－	－	－	粒数	
	P90	円形	20	20	24	14.9	24cc	楕円形	13	11	23	赤	
SB3	P48	円形	28	28	27	14.8	32cc 短軸：24cc	円形	12	11	23	○	SB2P43より新，粒数 埋g：炭片
	P51	円形	19	18	25	15.0	長円24cc	－	－	－	－	粒数	
	P56	円形	24	22	29	14.9	30cc	円形	10	13	23	赤	
	P58	円形	26	24	34	14.7	28cc	楕円形	14	11	23	赤	SB2P43より新
	P70	円形	23	22	24	14.9	26cc	円形	13	14	23	赤	SK10より新
	P71	円形	23	22	24	15.0	長円28cc・g	－	－	－	－	埋g：炭片少量 粒数，礫石	
	P72	円形	23	22	14	15.0	長円24cc・g	－	－	－	－	埋g：炭片，埋土粒子少量 粒数	
	P73	円形	26	24	29	14.9	24cc・g	円形	13	12	23	赤	埋g：埋土粒子少量
	P79	円形	24	22	31	14.8	長円24cc・g	－	－	－	－	埋g：炭片少量，粒数	

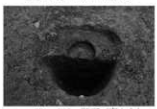
●ピット（柱穴・小穴）類型

●その他の記載事項

■柱穴・ピットの計測値
・（数値）は推定値を示す
■柱穴・ピット断面の「埋土・埋土（埋積土）」記載事項
・柱穴の場合は「柱方埋土」を意味する
・「1 層・2 層」等の記載：「柱穴・小穴」の埋土等が2層以上に分層した場合を示す
・「抜穴」：柱抜き取り穴の埋土・埋積土，「抜穴 1」：抜き取り穴1層の埋土・埋積土
・「切穴」：柱切り取り穴の埋土・埋積土，「切穴 1」：切き取り穴1層の埋土・埋積土
■建物種の記載事項
・柱抜取：柱が抜き取られているもの　・柱切取：柱が切り取られているもの
・この他，実施図版・出土遺物を記載

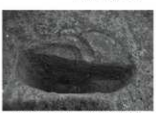
小平館跡Ｂ区　SB1 掘立柱建物跡　完掘状況（北から）

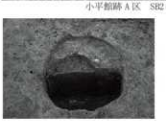
SB1・P17　断面（南から）

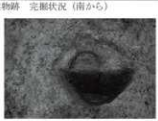

SB1・P25　断面（南から）

小平館跡Ａ区　SB2・3 掘立柱建物跡　完掘状況（南から）

SB2・P49（右）、SB3・P48（左）
断面（北から）

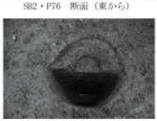

SB2・P59（右）、SB3・P58（左）
断面（南から）

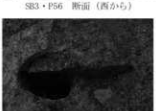

SB2・P43　断面（南から）


SB2・P76　断面（東から）

SB3・P56　断面（西から）

SB2・P60（右）、P61（右）
断面（東から）


SB2・P87　断面（北から）


SB3・P70（左）、SK10（右）
断面（東から）

SB2・P63　断面（東から）

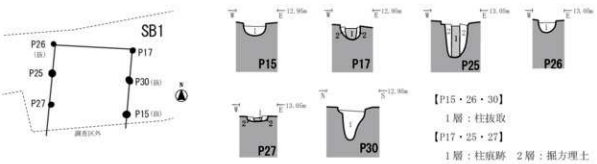
SB2・P90　断面（北から）

SB3・P73　断面（西から）

第30図　SB1～3 掘立柱建物跡　完掘状況・柱穴断面

【ＳＢ１　掘立柱建物跡】（第 23・30・31 図、第 4・5 表）

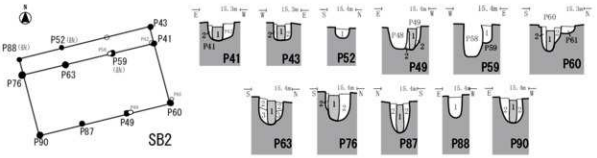
Ｂ区中央部付近で検出した。南北２間以上、東西１間の南北棟建物跡である。建物南側は、調査区外へ延びている。建物は、P15・17・25・26・27・30 の６個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、３個(P17・25・27)で柱痕跡を確認し、３個(P15・26・30)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長 3.2m 以上、柱間寸法は北から 1.6m・1.6m、梁行が北側柱列で総長 4.2m である。方向は、真北に対して東に 6°傾く（N-6°-E）。柱穴は長軸 23～38cm の円形・楕円形で、深さは５～45cm である。柱痕跡は、長軸 12～17cm の円形である。遺物は出土していない。



第31図　SB1掘立柱建物跡　平面・断面図　※平面図S=1/200　断面図S=1/50

【ＳＢ２　掘立柱建物跡】（第 28・30・32 図、第 4・5 表）

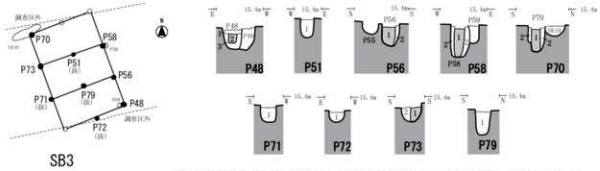
Ａ区西側で検出した。東西３間・南北１間の身舎の北側に庇が１間付く東西棟建物跡である。SB3、P42・61 と重複し、SB3 より古く、P42・61 より新しい。建物は、P41・43・49・52・59・60・63・76・87・88・90 の 11 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、８個(P41・43・49・60・63・76・87・90)で柱痕跡を確認し、３個(P52・59・88)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長 7.2m、柱間寸法は西から 2.4m・2.4m・2.4m、梁行が西側柱列で総長 4.1m である。北側の庇の出は 0.8m である。方向は、真北に対して西に 15°傾く（N-15°-W）。柱穴は長軸 20～33cm の円形で、深さは 14～42cm である。柱痕跡は、長軸 11～15cm の円形・楕円形である。遺物は出土していない。



第32図　SB2掘立柱建物跡　平面・断面図　※平面図S=1/200　断面図S=1/50

【ＳＢ３掘立柱建物跡】（第 28・30・33・34 図、第４・５表）

Ａ区東側で検出した。南北３間、東西２間の南北棟の総柱建物跡である。建物の北東部分・南西部分の一部は、調査区外へ延びている。SB2、SK10 と重複し、これらより新しい。建物は、P48・51・56・58・70・71・72・73・79 の９個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、５個(P48・56・58・70・73)で柱痕跡を確認し、４個(P51・71・72・79)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長 5.3m（推定値）、柱間寸法は北から 1.7m・1.8m・1.8m（推定値）、梁行が南側柱列で総長 3.4m（推定値）、柱間寸法は西から 1.8m(推定値)・1.6m である。方向は、真北に対して西に 20° 傾く（N-20°-W）。柱穴は長軸 19～28cm の円形で、深さは 14～50cm である。柱痕跡は、長軸 12～16cm の円形・楕円形である。遺物は P71・１層から砥石１点（230g）（第 34 図４）が出土した。



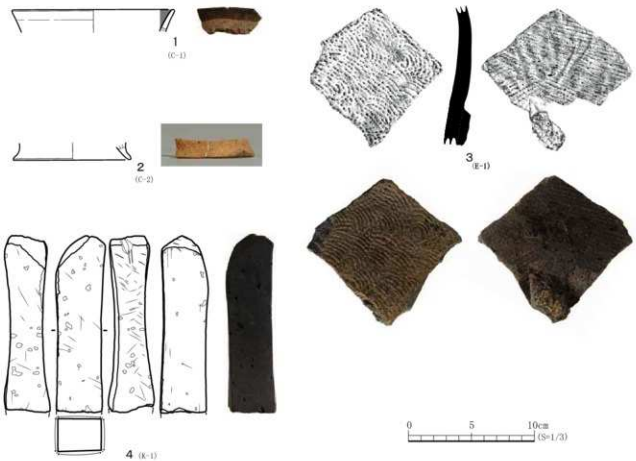
【P51・71・72・79】１層：柱抜取　【P56・58・70・73】１層：柱痕跡　２層：掘方埋土
【P48】１層：柱切取　２層：柱痕跡　３層：掘方埋土

第33図　SB3掘立柱建物跡　平面・断面図　※平面図S=1/200　断面図S=1/50

小平館跡（１次調査）作業風景

（4）その他の出土遺物（第 34 図）

この他、確認調査時の T-13 遺構検出面で須恵器甕片 1 点（185g）（第 34 図 3）が出土した。



No.	遺構・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	P24 埋積土	土師器	坏	口縁部	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・灰黄色(2.5Y6/2)/暗灰黄色(2.5Y4/2)、内面：暗灰色(N3/0)、法量：口径(12.8)cm・残存高1.8cm・器厚0.3～0.4cm	C-1
2	SK2 1 層	土師器	高台付坏	高台部	内外面：ロクロナデ・磨滅、色調：内外面・明黄褐色(10YR7/6)、法量：高台部径9.4cm・残存高1.4cm・器厚0.2～0.7cm	C-2
3	T-13 検出面	須恵器	甕	胴部	外面：平行タタキ、内面：同心円当て具痕、色調：外面・灰色(N5/0)、内面・オリーブ灰色(N6/1)、法量：器厚0.7～1.2cm、外面：須恵器片付着	E-1

No.	遺構・層	器種	石材	残存部位	法量				備考	登録
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)		
4	SB3・P21 1層	砥石	泥岩	完形	14.00	3.62	2.60	230.0	素材：剥片	K-1

第34図　小平館跡（1次調査）出土遺物

第Ⅳ章　総　括

今回の調査で検出した遺物・遺構について、ここでは、その特徴や時期を検討し、本遺跡における各時代の特徴をまとめる。

1. 出土遺物の特徴と時期

出土した遺物は、土師器、須恵器、石器である。出土した土器類の総数は 26 点（約 270g）、石器類の総数は 1 点（230g）である。このうち、土器類の内訳は、土師器が 24 点（約 80g）、須恵器が 2 点（約 190g）、である。これらの出土遺物のうち、本報告では、第Ⅲ章 2（2）で示した抽出基準に基づき、土器類 3 点、石器類 1 点を図示した（第 34 図）。

(1) 土師器・須恵器

土師器には坏・高台付坏・甕があり、その大半がロクロ成形によるものである。坏類には内面黒色処理を施したものと赤焼土器がある。須恵器には壺類・甕がある。

これらの土師器・須恵器はいずれも小破片のため、詳細な年代を推定することは難しいが、土師器坏類の特徴等から、概ね平安時代のものと考えられる。

(2) 石器

石器は、砥石 1 点出土した。石材は泥岩である。町内の出土事例から、概ね中世以降のものと推定される。

2. 検出した遺構の特徴と時期

今回の調査では、掘立柱建物跡 3 棟、溝跡 1 条、土坑 12 基、ピット 66 個を検出した。ここでは、これらの遺構の堆積土の特徴・出土遺物・遺構の重複関係等からその時期について検討する。

(1) 掘立柱建物跡及びその他の柱穴・ピット

掘立柱建物跡 3 棟、柱穴・ピット 66 個を確認した。これらの柱穴・ピットは、掘方が円・楕円形を主体とし、長軸 20～40㎝ 前後の比較的小規模の掘方になるものが多く、掘方埋土は黒褐色・暗褐色シルト土を主体とするものである。このうち、建物として認定できなかった柱穴・ピットは、堆積土・埋土、掘方の形状・規模の特徴が、掘立柱建物跡（SB1～3）を構成する柱穴と類似しており、これらとほぼ同時期のもので同様の性格を有していたと推定される。

掘立柱建物跡には、3 間×1 間で庇が付くもの（SB2）、3 間×2 間（SB3）、2 間以上×1 間（SB1）のものが確認された。その他の柱穴・ピットは、これらの建物周辺に特に多く分布している傾向が認められた。今回の調査区は調査面積が限られていたため、掘立柱建物跡として認定できたものは 3 棟のみであるが、その他の柱穴・ピットについても掘立柱建物や柱穴列などを構成する柱穴跡であった可能性が高く、今回の調査区周辺にはさらに建物等が存在し、これらが屋敷地を構成していたと考えられる。

掘立柱建物跡（SB1～3）や柱穴・ピットの所属時期については、SB3 掘立柱建物跡の柱穴（P71）で砥石、その他の柱穴・ピットで土師器片・須恵器片が少量出土しているのみであり、遺物のみで年代を特定することは難しい。そこで、周辺の町内の調査事例についてみてみると、こうした比較的小規模の柱穴・ピットの特徴は、中・近世以降の掘立柱建物跡を構成する柱穴に類似しており、今回検出された建物跡・柱穴・ピットについても概ね同様の時代のものと推定される。加えて、今回の調査区は、中世の小平館跡の東端部に位置し、その約 100m 東側に位置にする北経塚遺跡では、13 世紀後半～14 世紀前半以降の屋敷地が確認されている（山田ほか 2010・2013）。こうした周辺の遺跡との位置関係や歴史的環境を踏まえると、今回の調査で確認

された建物跡、柱穴・ピットの多くは、中世の小平館跡や北経塚遺跡と関連する遺構である可能性が十分想定でき、その所属時期については、現段階では中世以降に属するものとして捉えておきたい。

(2) 溝跡

溝跡は1条（SD1）確認した。SD1からは平安時代の土師器片・須恵器片が出土しており、少なくとも平安時代以降の遺構であると考えられる。遺構の特徴についてみてみると、SD1の主軸方向は、その西側で確認されている掘立柱建物跡とほぼ同様で、堆積土の特徴についても黒褐色・暗褐色シルト土を主体とし、建物や周辺の柱穴・ピットと類似している。また、溝の周辺では柱穴・ピットの分布が希薄である。このことから、SD1溝跡は、掘立柱建物跡と関連性の高い遺構であると考えられ、これらと同時期の遺構である可能性が高い。溝跡の性格については、建物と溝跡の位置関係から屋敷地を区画するための溝である可能性が想定される。

(3) 土坑

土坑12基（SK1～12）確認した。土坑の平面形には、円形（SK1・3）・楕円形（SK2・5）・隅丸長方形（SK4・6～9）・長楕円形（SK10）・不整形（SK12）・不明（SK11）などがある。SK4・5・10については、その形状・堆積土の特徴から、土坑墓の可能性が考えられる。このうち、遺物が出土したのはSK2のみで、その特徴から平安時代以降のものと推定される。この他の土坑については、遺物が出土していないため、時期不明であるが、遺構の重複関係から、SK9・10は掘立柱建物跡・柱穴・ピット、SK6はSD1溝跡より古い遺構であることが確認されている。また、これらの土坑は、堆積土の特徴から、褐色（7.5YR4/3）シルト土を主体とするもの（SK3・6～9・11）と、黒褐色・暗褐色シルト土（10YR3/2～3/4）を主体とするもの（SK1・2・4・5・10・12）に大きく分けることでき、両者は時期の異なる遺構である可能性が考えられる。

以上のように、今回の調査で確認された土坑については、出土遺物がほとんど認められないため、時期不明のものが多いが、調査区内の出土遺物や、建物跡・柱穴・ピット、溝跡との重複関係を考慮すると、建物と同時期もしくはそれ以前（平安時代）のものが混在していると考えられる（註）。

3. まとめ

- 小平館跡は、阿武隈山地から東に延びる標高12～32mの中位・低位段丘上の平坦面・緩斜面に立地する。今回の調査では、掘立柱建物跡3棟、溝跡1条、土坑12基、ピット66個を検出し、土師器、須恵器、砥石が出土した。
- 掘立柱建物跡（SB1～3）及びそれ以外の柱穴・ピットは、その特徴や周辺の調査事例から概ね中世のものと推定される。溝跡（SD1）についても、その分布や堆積土・主軸方向から同時期の可能性があり、これらが屋敷地を構成していたと考えられる。
- 今回の調査区西側の丘陵頂部には小平館跡の主郭が存在する。また、調査区の約100m東側に位置にする北経塚遺跡では中世の屋敷地が確認されている。以上のことから、今回の調査区を含む小平館跡東側一帯には、館跡に関連する中世の屋敷地が分布していた可能性が考えられる。
- 土坑（SK1～12）は、出土遺物や重複関係から概ね中世のものとそれ以前のものと想定される。

註　小平館跡の範囲内では、今回の調査区の西側でも発掘調査が実施されており（小平館跡2・3次調査：平成24・25年度調査）、そこからは、古墳時代前期の遺構が確認されている。今回確認した時期不明の遺構の中には、古墳時代前期の遺構も含まれている可能性がある。また、近隣の北経塚遺跡では、縄文時代前期の遺構が確認されており、これらの堆積土は褐色シルト土（7.5YR4/3前後）を主体としている（山田ほか 2010・2013）。今回の調査区で確認された土坑の中には、堆積土の面で北経塚遺跡の遺構と類似するもの（SK3・6～9・11）があり、これらの中には縄文時代前期の遺構が含まれている可能性も想定される。

引用・参考文献

青山博樹ほか 2000「宮城県山元町合戦原古墳群の測量調査」『宮城考古学』第 2 号
吾妻俊典 1994「多賀城跡周辺における須恵器製作技法の変化」『古代の土器研究　律令的土器様式の西・東 6　須恵器の製作技法とその転換』
天野剛隼・笠原俊哉　亘理町教育委員会 1998『十文字館跡』亘理町文化財調査報告書第 6 集
飯村均 2009『中世奥羽のムラとマチ　考古学が描く列島史』東京大学出版会
石黒伸一朗 2005「山元町の板碑と蔵王町の中世石塔」『宮城考古学』第 7 号
伊藤晶文 2006「仙台平野における歴史時代の海岸線変化」『鹿児島大学教育学部紀要自然科学編』57
岩見和泰・佐藤憲幸　1991「合戦原遺跡」『合戦原遺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第 140 集
氏家和典　1957「東北土師器の型式分類と その編年」『歴史』14
岡田茂弘・桑原滋郎 1974「多賀城周辺における古代須恵器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所
小山正忠・竹原秀雄編 1973『新版標準土色帖』2010 年版
鍛冶一郎 1971「合戦原古墳群」『山元町誌』
加藤道男 1989「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』
窪田忍　1995『狐塚遺跡』山元町文化財調査報告書
桑原滋郎 1976「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
小井川和夫 1984「いわゆる赤焼土器について」『東北歴史資料館研究紀要』第 10 巻
佐々久・志間泰治・氏家和典　1971「井戸沢横穴古墳群発掘調査報告書」『山元町誌』
白鳥良一 1980「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要Ⅵ』宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥良一 1982「土器」『多賀城跡政庁跡本文編』宮城県多賀城跡調査研究所
笹鉄正陸　1974『史料 仙台領内古城・館』第四巻
志間泰治 1956「宮城県亘理郡における考古学上の遺跡」『宮城県の地理と歴史』1
志間泰治 1975『亘理の古墳』
志間泰治 2007『鹿狼 1　歴史を掘り起こす』
関敬司 2004『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 3 集
仙藩叢書出版協会 1893『仙台叢書　封内風土記　巻ノ九』
仙藩叢書刊行会 1923『仙藩古城誌』『仙台叢書』第 4 巻
千葉正雄 1993「狐塚遺跡」『狐塚遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 157 集
東北古代土器研究会編 2005『研究報告 2　東北古代土器集成-古墳後期～奈良・集落編-<宮城>』
東北中世考古学会編 2001『東北中世考古学叢書 2　掘立と竪穴　中世建構論の課題』高志書院
初鹿野博之・山口淳・千葉直樹・大坂拓 2012『西石山原遺跡ほか-常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ-』宮城県文化財調査報告書第 230 集
初鹿野博之 2013a「浦沢遺跡」『発掘された日本列島 2013 新発見考古学速報』文化庁
初鹿野博之 2013b「宮城県山元町内手遺跡、上宮前北遺跡」『第 39 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
初鹿野博之 2014「宮城県山元町熊の作遺跡」『第 40 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
初鹿野博之 2015「熊の作遺跡と荒理郡衙跡の遺跡群」『第 41 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
引地弘行 2002「餅の内遺跡」『名生館遺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第 188 集
福島考古学会中近世部会編 2000『福島県考古学会中近世部会平成 12 年度研究セミナー　東北地方南部における中近世集落の諸問題』
藤田至則・加納博・滝沢文教・八島陸一 1988『角田地域の地質』地域地質研究報告　地質研究
藤本英子・松本秀明　2012「阿武隈川付近における浜堤列の分類とその形成時期に関する再検討」『人間情報学研究』第 17 巻
文化庁文化財部記念物課編 2010『発掘調査の手引き-集落遺跡発掘編-』
文化庁文化財部記念物課編 2010『発掘調査の手引き-整理・報告書編-』
松本秀明 1984「海岸平野にみられる浜堤列と宮新世後期の海水準変動」『地理学評論』57
宮城県考古学会編 2010『平成 22 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2011『平成 23 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2012『平成 24 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2013『平成 25 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2014『平成 26 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県企画部土地対策課編 1988『土地分類基本調査　角田』
宮城県史編さん委員会 1970「仙台領古城書立之覚」『宮城県史』32　資料編 9
村田晃一 1992「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』
村田晃一 1994「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』
村田晃一 1995「宮城郡における 10 世紀前後の土器」『福島考古』第 36 号
柳澤和明 1994「東北地方の施釉陶器」『古代の土器研究一律令的土器様式の西・東 3　施釉陶器一』
山田陸博 2008『企画展図録　亘理郡の古墳時代』山元町歴史民俗資料館
山田陸博 2015a「山元町千筋遺跡の津波痕跡」『宮城考古学』第 17 号
山田陸博 2015b「山元町の復興調査と合戦原遺跡の横穴墓群」『古代国家形成期の地域社会-山元町の調査から-』平成 27 年度宮城県考古学会
　　総会・研究発表会資料
山田陸博・村上裕次・山口淳 2010『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 4 集
山田陸博・藤田祐・佐伯奈弓 2013『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 5 集
山田陸博・藤田祐・佐伯奈弓 2014『的場遺跡』山元町文化財調査報告書第 6 集
山田陸博・藤田祐 2014『石垣遺跡』山元町文化財調査報告書第 7 集
山田陸博・丹野修太 2014『日向北遺跡』山元町文化財調査報告書第 8 集
山田陸博・藤田祐 2015『日向遺跡』山元町文化財調査報告書第 9 集
山田陸博・藤田祐・佐伯奈弓 2015『中筋遺跡』山元町文化財調査報告書第 10 集
山元町史編纂委員会編 1971『山元町誌』
山元町史編纂委員会編 1986「中島貝塚」『山元町誌 二巻』
吉野武 2015「熊の作遺跡出土の木簡と墨書土器」『第 41 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
渡部義彌 1931『亘理郡史』

報 告 書 抄 録

ふりがな	こだいらたてあとⅠ
書名	小平館跡Ⅰ
副書名	小平地区宅地造成工事に係る発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	山元町文化財調査報告書
シリーズ番号	第11集
編著者名	山田隆博
編集機関	山元町教育委員会
所在地	〒989-2203　宮城県亘理郡山元町浅生原字日向12-1　電話0223-37-5116
発行年月日	平成27（2015）年6月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
こだいらたてあと 小平館跡	みやぎけん 宮城県 わたりぐん 亘理郡 やまもとまち 山元町 こだいらあざなし 小平字北	043621	14020	37度 58分 58秒	140度 51分 54秒	2013.02.20 ～02.28	425㎡	小平地区宅地造成工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小平館跡	屋敷跡	中世	掘立柱建物跡、溝跡、柱穴・ピット	砥石	掘立柱建物跡3棟、溝跡1基、柱穴・ピット66個
	散布地	時期不明	土坑	―	土坑12基
	散布地	平安時代	―	土師器・須恵器	―

要約

・小平館跡は、宮城県南東部の亘理郡山元町小平字北地内に位置し、阿武隈山地から東に延びる標高 12～32m の中位・低位段丘上の平坦面・緩斜面に立地する。今回の調査では、掘立柱建物跡3棟、溝跡1条、土坑12基、ピット66個を検出し、土師器、須恵器、砥石が出土した。

・掘立柱建物跡（SB1～3）及びそれ以外の柱穴・ピットは、その特徴や周辺の調査事例から概ね中世のものと推定される。溝跡（SD1）についても、その分布や堆積土・主軸方向から同時期の可能性があり、これらが屋敷地を構成していたと考えられる。

・今回の調査区西側の丘陵頂部には小平館跡の主郭が存在する。また、調査区の約 100m 東側に位置にする北経塚遺跡では中世の屋敷地が確認されている。以上のことから、今回の調査区を含む小平館跡東側一帯には、館跡に関連する中世の屋敷地が分布していた可能性が考えられる。

・土坑（SK1～12）は、出土遺物や重複関係から概ね中世のものとそれ以前のものと想定される。

山元町文化財調査報告書第11集

小 平 館 跡 Ⅰ

－小平地区宅地造成工事に係る発掘調査報告書－

平成27年6月30日発行

発行　山元町教育委員会
宮城県亘理郡山元町浅生原字日向12-1
TEL0223-37-5116／FAX0223-37-0119

印刷　株式会社 東北プリント
宮城県仙台市青葉区立町24-24